悪魔　―Akuma―

封弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔　―Ａｋｕｍａ―

【Ｎコード】
Ｎ１０５９Ｄ

【作者名】
封弥

【あらすじ】
黒の組織達の元へと行きたいとコナンに切り出す哀。だが、死なせたくないと言ったコナン。でも、最後には認めてしまって組織へと行く。だが…そこで、重傷を負って…そして…後日、病院で解毒剤を渡される。だが、飲んだ後解毒剤に異変が生じる…。其れの謎を究明中に、組織の一人が家に訪ねてきて…（現在までのあらすじ）

第一話　覚悟（前書き）

誤字などにも注意していますが、脱字・誤字など見つかりましたら報告お願いします＜＞

第一話　覚悟

「最低よね…私」

本名が宮野志保。そして、偽名が灰原哀。
そんな私の口からはかれた言葉は、これだった。

「いきなりなに言ってんだよ」
「…そろそろ、罪滅ぼしに組織に行こうと思ってるの」
「ばか！！！あぶねーだろ！お前が死んだらどうする！」
「『罪滅ぼし＝死ぬ』だけど？」
「死ぬっているなら俺がゆるさねぇ」
「どうして…其処まで私を庇うの」
「確かに、お前は俺を小さくさせた組織の一員だけど…」

小さくなったからって組織のことは関係ない。
今は大切な仲間だと思える。一番大切な奴だな、と。
だから…組織に行くなら、自分が行ってその場で死ねたら本望だと彼は言う。
そんなの…私が許さない。

「結局は貴方が死ぬんじゃない！」
「お前のためなら、死ねる」
「そんな…」

止めてよ、と小さく言う。
貴方には行かせない、絶対に、とまだ言葉が出てくる。

「罪滅ぼしは私が受けるのよ！！」
「俺も一緒に受ける」
「だから…もうやめ…」
「こんにちはーーー！！」

私の声を遮って代わりに聞こえてきたのは、何時も聞き飽きるほど聞いたあの３人組の声。

「どうしたの？コナン君も、哀ちゃんも。凄く、暗い顔してるけど…」
「内緒話かよ。ずりーぞ！！」
「元太君。そんなに二人を責めてあげないでください！…僕たちで良ければ、聞きますが」
「いや…話せねぇことなんだ。すまねぇな」
「隠し事は良くないけど…わかった」
「ごめんなさいね」

私は軽く謝るしかできなかった。
言ってしまっても彼女たちには理解できないこと。
ＡＰＴＸ４８６９なんて聞いても、私たちが偽名を使って生活をしていることも…。
ただ、今はこのままで良いのか、と言うことだけ。
私は、組織に行って丸く収めたい。
どうせ…無理だろうけど…。
説得してもその挙句、死ぬ――そんなのとっくに知っていたこと。
本当は、組織を追い出されたあの時死ぬかと思っていた。
なのに、体が縮むだけのＡＰＴＸ４８６９を飲んでいた。

「なんであの時、死ねなかったんだろう」
「ん？哀ちゃん、なんか言った？」

「いいえ。何でもないわ」

ねぇ工藤君。どうして、貴方はそんなに私を助けるの。
どうして、死なせてくれないの。
バスジャックの時も、ベルモットと会ったときも…。
貴方は、必死で私を助けた。
どうして…「自分の運命から逃げるな」なんて言うの。
私は逃げてるんじゃない。元から死んでしまえば良かったとしか思っていない。
…直接、工藤君に聞いてみよう。そうしたら、きっと解る。

「……江戸川君。一寸良いかしら」
「あ？あぁ…。ごめんな歩美ちゃんとか、少し待っててくれるか。博士、おやつとか適当に出しといてくれるか？」
「解ったよ。ほれ、ケーキじゃぞ」
「わーい！！」

そんな声を背中に、地下の研究室に彼を連れて行く。
扉を静かに閉めて彼の方を向く。

「どうしたんだよ、灰原」
「一寸聞いて良い？」
「あ…あぁ…なんだよ」
「どうして…私を死なせてくれないの」
「なっ…何言ってるんだよ！！」

何時だって私は、死のうと一人で努力してきた。
なのに…貴方と来たら、「自分の運命から逃げるな」だなんて。
私は逃げている訳じゃないのに…

「お前の存在は確かに危ないかもしれない」
「え？」
「だけど…今はお前を守る。そう決めた」
「お願いよ…死なせてよ。お願い…工藤君」
「無理。お前を死なせない。ぜってーにな」
「……どうしても？」
「あぁどうしても、だ。絶対にお前を組織から守り抜く」

だから、バスジャックも、ベルモットの件も全て私を守ろうとして…。
あんな危険な真似を。
でも、工藤君。私は覚悟してるのよ。
例え、貴方の反対があったとしてもこれだけはやってみせる。

「でも…私は覚悟してる」
「何をだ」
「近いうちに組織に行く。これだけは、誰に反論されようが絶対に行く」
「当然…俺も行くからな。お前を一人にはさせない」
「…解ったわ」

何言ってるんだろう、私。
結局『解った』だなんて。
甘すぎるわね…私も。宮野志保の頃ってこんなに甘かったかしら？

「ありがとう。これだけ聞きたかったから」
「…あ、待て」
「どうしたの？」
「絶対に、お前を守るから。だから…無茶するな」

今までにない、柔らかくて、穏やかで、優しい言葉だった。
私はただ、えぇと答えてみんなの元へと戻った。

「あ、お帰り哀ちゃん！コナン君もお帰りなさい！」
「御免なさい。一寸時間を使ってて…」
「大丈夫ですよ。このケーキ、灰原さんが作ったんですよね！？凄く美味しかったですよ！」
「灰原のケーキ、上手かったぜ！また食わせてくれよな！」
「全く…そう作れって言われて作れるものじゃないのよ」

この言葉の意味は、今回のケーキを意味する…とみんなは思っている。
でも…私の場合は解毒剤も同じ。そう簡単に、作れるものじゃない…。
作れるものなら…あ、今作っている途中だったわね。

「灰原」

私の背後で、肩をつかむ彼。
どうしたのよ、と冷たく返してしまう。

「何時…行くんだ」
「解らないわ。ただ…あの子たちを悲しませたくないから、今は行かない。でも…」
「『早めには行きたい』だろ」
「そんな感じね」

一体何時になるのだろう。解毒剤が完成してからなのかもしれない。
でも…解毒剤が完璧に完成するかどうか、解るはずもない。
完成したら…貴方は、蘭さんの元に戻るのよね？

でも私は…警察に出頭する。
今までも罪を全て償うためにね。
組織だけでは足りない。ちゃんとした、懲役ぐらいは受けないと。

でも…でも…

貴方は其れを許してくれる？
本当は私の覚悟も、許してはいないんでしょう？

第二話　弱い自分

私の覚悟を許しているわけがないよね？…工藤君。

口では、許してくれているようだけれど内心凄く反対しているんだと思う。

でも、私の覚悟は決して揺らがない。もう、随分前から決めていたこと。

いつか…組織に行かないと、大変なことになる。

夜。私は布団の中で、あの子たちにどう言えば良いのか色々と考えた。

「暫く、用事でいなくなるから」とかその他にも四つ五つは、言い方を考えついた。

でも、用事だけで、彼女たちは認めてくれるのだろうか。

すんなり、ＯＫを出すのだろうか。

でも、出すはずが…ないよね。

覚悟なんて…所詮軽いもので終わったのかしら。

覚悟って…決めるのは重いものなのに、いざ実行となると、凄く軽いものなのかしら。

私の場合は、どっちも重い物…ね。

そのとき、扉をノックする音が聞こえた。

どうぞ、と軽く返事をして、起きあがる。

「わりぃ。起こしたか？」

「くっ…工藤君！？今一体何時だと思っているのよ！」

時計はとっくに、夜中の十二時を回っている。何故、博士の家にいるのだと。
蘭さん達と寝ているんじゃないの？
「…部屋を抜け出してきたんだ。今、この瞬間しかないような気がしたから」
「何をしようって言うの」
「着替えろ。行くぞ、組織に」
「えっ！？い…今から！？」
彼は、ゆっくりと顎を引いた。
「待ってよ…まだ、心の準備も出来て無いわよ」
「言ったろ？『例え、何があってもお前を守る』ってな。安心しろ」
「……ありがと」
「珍しく素直じゃねぇか」
「素直じゃない方が良かったかしら」
「いや、どっちもどっちだ」
正直、嬉しいけれど…嬉しいんだけども、工藤君の命も懸かっている。
勿論、殆どは私に懸かっている。
そんな私を彼は守るって言うの？
最悪なことをしてきた私を、貴方は守るの？
組織の一員だった私を、本当に守りたいの？
色んな事が疑問となって浮かんできた。でも、そんなに質問をぶつける勇気なんて無かった。
彼の答えるときに出てくる言葉が決まっていそうだから。
いや、決まっている。『守りたいからこんな事言ってるんだろ』と

でも言い返されると思う。

家を出て数十分。私を体を変な電気が走る。凄く激しい威圧感を感じる。
私の後ろの方で誰か居る。
私の体は、その威圧感を感じ震え始める。

「く…工藤君」
「あ？どうし…灰原！？」

私の両肩をつかみ、どうしたんだよと言う。
あの人がいると私は答える。

「逃げるぞ！」
「えっ…ちょ」

私の腕を引き、どんどんと走り出す。
彼は、私が狼狽えているのも気にせずずっと走り続ける。
どうして…此処まで私を。

走る続けて、早二時間。

「……ここだな」
「えぇ。そう…工藤君！！！あれ！」
「あ……何で彼奴ら！？しかも、こんな夜中に…」

さっと身を隠した私たち。なぜなら、その先にはあの三人がいるから。
夜中なのに、少年探偵団の三人が来ている。おかしすぎる。

「なぁ光彦！此処何処なんだよ！」
「僕に言われても知りませんよー！」
「コナン君達に聞いてみる？」
「でもよー昨日の夜に忽然といなくなったんだぜ？」
「いるかどうかだなんて確定できないですよ。灰原さんもいないですし」

一連のやりとりを聞いている間、私も工藤君も口を開くことはなかった。
そして、三人が立ち去った後、出ようとした私。
しかし、工藤君の手が私の口を塞ぐ。

「何すんのよ」
「彼奴らがいるの、見えないのか」
「そうだったわね。……待って。見覚えのない奴がいる」
「え？」

そう言ってまたそろりと顔を出す。其処には確かに、ジンとウォッカがいる。
だが…それにもう一人女が一人いる。
身長的にベルモットではない。
子供ぐらいの大きさなのだ。

「誰よ、あれ。見たことも…」

その瞬間、私ははっと固唾をのんだ。
もう近くにジンがいるからだ。
瞬間移動でもしたのか。
ジンの姿がないことには気がつかなかった。

「工藤新一、シェリー。待ってたぞ」
「……会いたかったぜ。ジン」
「ま、同じだがな」

そう言っていきなり銃を突きつける。

「ウォッカ。此奴らを連れて行け」
「解りやした」

そう言って、二人を連れて行く。
やっぱり…小さくなっても解ってたのね。私の正体。
小さく溜息をついた後、右横で銃声が聞こえる。

「！！！！？」
「あれ、光彦達じゃねぇか！！」

三人は、銃で何発か撃たれたのか三人が三人腕から血を流し、倒れている。

「ちょっと！何で罪のないあの子たちまで傷つけるの！？」
「邪魔なだけだ」

…冷酷非情と言いたかったのだが、口からは出てこなかった。

「上等じゃんか」
「工藤君！？」
「ゲーム開始か？ジン」
「…勝手に始めたの、よくわかったな」
「その行動で丸わかりだぜ」

「ルールは知っているだろ」
「あぁ…何度もやらされたよ」
何処でやらされたのよ、と言う質問を飲み込む
そのとき、誰かの気配に気がつく。
「…誰か居る」
ぽつりと呟いた瞬間、工藤君は振り向く。
ふっと言うと工藤君は口を開いた。
「服部。なーにこそこそ隠れてるんだよ」
「…何や。きづいとったんかい」
「俺を甘く見るな。…お前もゲーム参加か？」
「工藤が危ないちゅうて、あの爺さん言うとったわ」
「博士、気づいてたのか」
「そうなんとちゃうか？」
彼は振り向き、ゲーム、開始やなと口元の端をあげる。
その瞬間に工藤君は、私を庇う。
私はその腕を振り払い、一目散に逃げ出す。
「灰原！！（姉ちゃん！）」
なんて弱き何だろう。
私が決めたことなのに…。御免なさい、工藤君・服部君。
そのとき、私の背後から足音が近づいてくる。
「灰原！！」

工藤君…。私は足を止め、振り向く。
その顔はいつの間にか泣いていた。
私でさえ、気づくのが遅かった。

「はい…ば…ら？」
「御免…なさい。私…凄く弱い…わ」
「んな事ねぇ！行くぞ！」
「……死にに行くわ」
「死なせない！ぜってー生きてろ！！」

強い口調だが、其れは私の耳朶をかすめる。

「またせたな服部。行くぞ」
「ったくこの姉ちゃんに構ってる暇あんねんやったら、この黒ずくめを何とかしてくれや」
「…どうも出来ないわ」
「何でや！？姉ちゃんが、止めるゆうたんやろ！？」
「油断禁物」

それだけを告げて、私は前へ一歩踏み出す。

「さぁジン・ウォッカ。殺すなら殺しても構わないわ。それから…隠れているシャロン」
「良い度胸ね（それより、隠れていることを解った方が凄いけれど）」
「早速死んで貰おうか。死ぬのは、怖くないのか」
「死ぬのは決して怖い事じゃない。私は覚悟していたもの。いつかそうなるんだって、ね」
「さよならだ――シェリー」
「えぇ。さよならで結構よ」

そう言って目を閉じる。拳銃はまっすぐに私の心臓当たりを狙っている。
私には解った。シャロンも私に向かって、銃を向けていること。
しかし、銃を放った音が聞こえて数秒。
私に痛みは感じない。そっと目を開けてみる。

其処には、息を荒くしてたっている――

「工藤君！！！！」
「死のうとするな！お前はこれから必死に生きていく人間だろうが！」
「嫌よ！死ぬ方がマシだわ！」

そう言って、離れる。その瞬間銃はまた音を立て、私の腹当たりをまんまと貫かれる。
――これを待っていたのよ。

そう呟き、その場に倒れ込む。

「灰原！！！服部、灰原を頼む！」
「了解や」

そう言って、私を抱き上げる。
遠のく意識の中で最後に聞こえたのは、工藤君の自分の運命から逃げるな――それだけだった。

第三話　最悪な殺人ゲーム

灰原…生きて帰れ。それだけを呟いて、振り向く。

「馬鹿な子――あの女のために命を使って」
「別に良いさ。俺は彼奴を守るって言っただけだ」
「全く。庇い合いも程々にしておいた方が良いわよ？」
「…ところで、聞くけどよ。其処の傍観しているだけの女、誰だよ」
「…私の事かしら」

そう言って、後ろに立っていた小さな女は歩いてくる。
推定年齢は、俺たちと同学年か其れより一年上の奴。
其奴は、赤紫色の髪でセミロング。
眼はきりっとしていて、悪い奴をと寄せ付けようとしまいというようなオーラを放っている。

「私は、紅…」
「『くれない』だと！？そんな名前を付ける奴が…」

紅だなんて名前は滅多に付けない。
でも、名前の通り髪の毛は赤色に近い。

「元々そう言う名前よ。工藤君」

しかし、喋る口調は灰原そっくり。
…しかも、彼奴は銃を片手に持っている。

「でも、何故俺の名前を知っているんだ」
「調べたら簡単よ。調べるまでもなく、貴方が工藤新一だって事は

一目瞭然。指紋が一致したしね」

何時、指紋をとったんだ？と思ったが、そうかと思い出す。
一時、俺は占い屋に指紋を採らせてと言われたことがある。
――そのときか。

しかし、その後紅はジンの横に立つ。

「お前も参加か」
「あら。参加した方が良かったんじゃなくて？」

口調は、何気にお嬢様っぽいと思うのは俺だけだろうかと一瞬思う。

「勝手にしろ」

吐き捨てるようにジンは言い、銃を俺の頭に向ける。
死ぬときが来た、と不気味に告げる。
そのとき、足音が聞こえてくる。

「工藤ーーーーー！！！」
「新一ーーーーー！！」

服部の声は解ったが、何故か――

「…蘭？」
「聞いたよ、全部。コナン君じゃなくて、本当は新一なんでしょ」
「済まんな工藤。全て言うてしもうた」
「いいんだ、言ってくれて良かった。サンキュ、服部。それに蘭、待ってたんだよ、そう言ってくれるの」
「ううん、良いの。――で、この人達が新一を小さくした人たちな

のね」

蘭の黒眸は怒りに満ちていた。しかし、それに構わずジン・紅・ベルモットは発砲する。
蘭は、吃驚したような顔をしたが俺が間一髪自分の体で食らったため、無傷。
しかし、体が耐えきれなくなったのかその場に倒れ込む。

「新一！！！」
「ら…ん。気にするな。これぐらい」

とは言ったものの、起きあがろうとすれば体に激痛が走る。
やりすぎたかと少々後悔したが後の祭り。

「庇い過ぎよ、新一。哀ちゃんの分も庇ったって聞いたよ？」
「良いんだ。彼奴を守るって言ったし、勿論蘭を優先する」
「工藤。行くで」
「あぁ――蘭はそこで待機してろ」
「え…！？ちょ新一！？」

痛みに構わず俺はサッカーボールを蹴る。ねらいは紅。
吃驚したような顔をして、その場に紅は倒れ込む。

「…（よえーな、此奴）」

服部の方も、家からこっそり日本刀を持ってきたらしく其れで闘っている。
だが、服部も俺も力が耐えきれず、体力はどんどん減っていった。

「工藤…どないすんねん」

「そう言われても知るかよ…力が…ねーんだから…よ」
俺は全身に発砲された玉を受け止めていたため、本当に体力がなかった。
力が抜けて、その場にへたり込む。

「新一！！！……きゃぁぁっ！！！」
蘭は、その場で発砲された弾を喰らい、倒れ込む。
完全に意識を失っている。
――畜生！！どれだけ強いんだ！！！

「弱い奴ばかりだな…工藤新一も大したことはなかったわけだな」
そう言って俺の傍に歩み寄って額に拳銃の口を当てる。

「本当にさよならだな――」
そう言って引き金を引いた瞬間――
倒れたのは俺じゃなかった。
俺より若干背の低い、茶髪で本名が宮野志保の――

「灰原ーーーー！！！！！！！！」
胸当たりから大量出血を起こしている。

「しっかりしろ！灰原！！！」
そう言ったのが聞こえたのか、ゆっくりと目を開ける。

そして、途切れ途切れに言う。

「く…どうく…ん。よ…かったわ…。助かった…わね、今まで…私を…ま…もってくれた…でしょ」

「馬鹿！！！何言ってるんだ、お前！！！お前が死ぬだろ！！」

「この程度で…死には…しないわ」

そんな寝ころんでいる灰原の胸からでている血は止まらない。そして、灰原は目から涙を一筋こぼした。

「死にたくない…けれど…死んだ…方が…ま…しでしょ」

「マシでも何でもねぇ！！！辛いんだよ！！！」

「新一…」

蘭も目が覚めたのか、痛みを耐えてゆっくりと起きあがる。

「哀ちゃんを…博士の家に連れて行ってくるね。すぐに…戻って……来るから」

「御免な、蘭。本当に御免な」

何度謝っても、堅苦しいなという返事しか帰ってこない。

「なんて愉快なんだ。工藤新一――お前の死に顔さえも見えている」

「…本当ね。この体で良く耐えたものよ。――紅とは違ってね」

「黙って…シャロン」

「あら、御免なさい」

「何故、八歳の人間に従っている」

ジンが強く言う。

黙ってって言われたら黙るものよ、とベルモットは返す。

「最悪な殺人ゲームかよ」
「そうさ。だから、罪のない人間だとかは関係ないのだ」
「なんで…蘭や、服部や灰原・歩美ちゃんや光彦や元太が――あんな目に遭わなきゃならないんだ！！！！」
「お前の方が先立ったのに、お前がほかを庇うからだ」
「そんな事じゃありません！！！」
「コナン君は、輝く未来のために―蘭さんの元に戻ってあげるための大切な未来のために―」
「命をかけてまで、一生懸命頑張ってるんだぞ！！」

何時のまに復活したのか、光彦・歩美・元太は腕に包帯を巻いている。
手当てして貰ったのか。

「蘭さんの元に戻ってあげるために、命をかけてまであなた達と闘っているんです！」
「勿論、私も参加するわ！新一さんのために！」
「そうだぞ！俺らは団結して乗り越えてきたんだ！」
「工藤ー！！寝ぼけててんと、はよやりぃ！」
「って言われても何をやるんだよ！サッカーボールは切れているし」

そのとき、光彦がなら…と言う。

「僕たちが役に立つんです！」
「俺たちでも出来ることはやってやるんだ！」
「コナン君は其処にいて！！」
「お前ら！！」

危険だって事は知っているはずだ。

相手は銃を持っている。勝てるはずがないのだ。
「例え傷ついても、最後までやり通すって歩美ちゃん達、言ってたよ。新一…あ！！！」
歩美達は、役に立ちたいという思いを胸に衝突したわけだが、銃撃を喰らいその場で倒れ込む。
やっぱり無茶をしたな、と思っただろう。
「新一…どうすれば良いの？服部君も哀ちゃんの看病に行っちゃったし…今唯一立っていられるの私たちだけだよ」
「――ちきしょう…！どうすれば良いんだ！！」
「落ち着いて、新一。何か策があるはずだよ」
「有ったらんな事いわねぇって」
「ごっ…御免」
「謝るな、蘭。俺がやられていること自体駄目なんだ」
精一杯やってきた、だから今死んでも悔いはない。
でも…何かを残して死んでいきたいとも思わない。
「死ぬときは一緒って…言ったじゃない」
「…そうだな。死ぬときには、一緒だぞ。蘭」
蘭は静かに顎を引く。
そして俺は立ち上がる。
「最悪な殺人ゲームだな、ジン。此処まで最悪なゲームじゃなかったはずだぞ！」
「私が勝手に過酷にしたのだよ」
「最悪よ…」

「蘭！」
「新一を此処まで傷つけて、何が楽しいのよ！！小さくたって新一は強い！平成のシャーロック・ホームズなんだから！頭が働くはず！」
「……蘭、後ろにいろ」
「し…んいち？」

こっそりポケットに忍ばせておいた拳銃を取り出す。
どこから其れをと蘭は叫ぶ。

「親父に貰った奴。持ってたから持ってきた――さぁジン。銃撃戦の開始だ」
「良く、其処までルールを覚えたものだな」
「俺の頭を何だと思っている。平成のシャーロック・ホームズだぞ？」
「それに、全身傷だらけなのに良く生きていられるわね」

ようやく紅は立ち上がる。
蘭逃げろ、と言おうとしたが後ろに蘭の姿はない。

「蘭！危ない！！」

紅の後ろに立っていた蘭は豪快なキックを食らわす。
しかし、其れを喰らってもすぐに紅は起きあがり拳銃を発砲する。
間一髪俺が蘭を庇い蘭は、無傷で済む。

「新一！！！」
「あぶねぇーって言っただろ…これ位…掠り傷…だ」

しかし、三人が復活した今俺たちに為す術がないような気がした。

拳銃を片手に俺を貫こうとする紅。
そして、ジンの前で倒れている歩美達を狙うジン。
最後に、蘭を貫こうとするシャロン。

どうすることも出来なくなった俺。
どうしても蘭を守る。死ぬときは一緒だ、と言った。
其れがかなうかどうかも微妙になってきた。

第四話　建物の中の迷路（前書き）

オリジナルキャラが出てきます。ご注意下さい。

第四話　建物の中の迷路

第四話　建物の中の迷路

本当に蘭を守り抜き、もしも無理なら一緒に死ぬと言う約束が果たせるかどうか、微妙になってきた。
現に俺は死ぬ寸前まで来ている。蘭は、まだ大丈夫だ。
それにしても服部。お前は一体何をしている。
灰原を看病しているだけだろ。
それとも…眼を離すと逃げ出すことを解っていて…。

そのとき、俺の探偵バッジから声がした。

『工藤。聞こえるか』
「はっと…りか。どうした」
『姉ちゃんの様態、かなり悪化してんねん！』
「何！？」
『意識も取り戻せへん。昨期から昏睡状態や』
「今、病院にいんのか？」
『せや。あの爺さんに連れて行ってもろたんや。そこで探偵バッジちゅう奴借りて、工藤に状況をゆうとこ思てな』
「サンキュー。俺もそろそろ体力無くなってきた。蘭を庇い続けているからな」
『…何や、和葉邪魔すんな！…あ、スマンな。こっちのことや』
「和葉ちゃん、来てるのか」
『着いていくゆうて来てな。ホンマ厄介な奴や』
「ハハ…じゃ、暫くこっちで銃撃戦やってるから、誰も来るんじゃねぇって言っといてくれ」
『了解や』

そう言って、服部の声はなくなる。
蘭の方に顔を向けると、蘭は薄く微笑む。
その顔は、無理しないでと言っている。

「残念だけ…ど蘭……俺は…死ぬつもりでいる」
「新一。それなら私も行くから」
「解って……いる」

意識が朦朧としてくる。
そんな意識を手放すまいと、必死に声を絞り出す。
夜中の銃撃戦は、終わりを迎え始めている。
もう、夜明けも近いからだ。

そこで俺が目に付いたのは、ジン達の後ろに聳え立つ建物。
そこに入れば夜明けだろうが勝負は可能。
俺は、蘭の手を引いて立ち上がる。
その建物に向かって一目散に駆け出す。

「新一！？」
「あの建物で勝負だ、ジン・紅・シャロン！」
「ほぉ。そこでやったら誰にもばれずに済むというのか」
「流石は平成のシャーロック・ホームズ。何時、其れを言うか待っていたのよ」
「あら、紅。知っていたのね。いつか、あの建物に入るかって事を」
「だって…トラップが一つ、有るんだもの」
「一つだけか」
「えぇ。二つも三つも付けたら、私たちが填ってしまうじゃない」
「確かにそうね」

そんな遣り取りを背中に建物に入っていく。
歩美達には申し訳ないとは思ったが、今は蘭の身が優先だ。
何処で鉢合わせになるかは解らない。迷路みたいなものだ。

「蘭、どうする？別れて行動するか…一緒に行動するか」
「当然、一緒。新一、一人にはさせられない」
「有難うな、心配してくれて」
「堅苦しいな、新一。何時も助けてくれたのは新一でしょ」
「そうか…ぐっ」
「新一！？」

突然、胸に痛みが走る。
その場にしゃがみ込んでしまう。
――これからが銃撃戦のクライマックスなのに！！！
俺は悔いたが、後の祭り。
動くことも出来ずに、その場で胸を押さえ蹲る。

しかし、次の瞬間。ふわりと俺の体が宙に浮く。

「…蘭」
「何時もコナン君の時、やったじゃない。これだったら逃げれるでしょ」
「御免な。本当に」
「良いの…新一が助かるな――！！！！」

その瞬間、銃の音が辺りに響き渡る。
蘭は、一目散に駆け出す。

「あっちよ！！」

紅の声が響き渡る。足音はどんどん速くなってくる。
それに連れられて、蘭のスピードも速くなっている。
今は三人が三人で同じ方向に向かって走っている。
もしも、三人が別れて行動を始めたら、大変なことになる。
建物の中の迷路って事かよ！！！

「大丈夫？新一。胸の痛み、治まった？」
「あぁ、何とかな」
「良かった。このまま死なれたら、私が死ねないなって」
「俺はしなねぇよ。お前を置いて死んではいかねぇ」

そう言って、蘭に笑顔を見せる。
蘭も静かに顎を引いた。

「俺は拳銃で彼奴ら攻撃すっから、お前はひたすら走り続けろ。疲れた場合は少し休んで良いけど」
「新一がそう言うのなら……解った。やってみるよ」

蘭はそう言うと、遅くしていた足を速くした。
しかし、数分もたたないうちに蘭は足を止める。
相当疲れたみたいだ。

次の瞬間、蘭はきゃっと声を上げる。
蘭は何者かに手を握られている。俺は拳銃を相手に向けた。
しかし、蘭の手を握っていたのは、紅でもジンでも、シャロンでも服部でもなく――
黄色いリボンで髪の毛をポニーテールにしている…

「…和葉ちゃん！？」

「平次に工藤君と蘭ちゃんが此処に居るて、聞いたんよ。大丈夫？」
「大丈夫じゃなさそうなの。昨期から、痛いって言ってたし…。でも、少しマシになったみたい」
「でも和葉ちゃん、何で来たんだ？服部に来ないでくれって頼んだのに…」
「無理矢理頼んだんよ。『蘭ちゃんと工藤君を助けに行く！』言うてな」
「本当に…危険だよ、和葉ちゃん。それでも良いのか？」
「ええんよ。うちが行くって言うてんやから」

どんな危険でも守ったる！と彼女は言い張るが、本当に出来るかどうかは解らない。
合気道が出来たとしても、其れが組織に通用する筈無い。
相手は銃だ。そして、こっちも銃。
銃撃戦の中をどうやって逃げていくか。
そういえば、と和葉ちゃんは俺に視線を向ける。

「工藤君。一体どないなってん！？」
「黒の組織がゲームを仕掛けてきている」
「ゲーム…？」
「そう。死ぬ確率が断然高い『殺人ゲーム』さ。其れでその中の第三ステージ『建物の中の迷路』だ」
「よぉ覚えてるんやね」
「あぁ。小さくなる前に何度もやらされたさ」
「だから新一。よく、傷だらけで帰ってくるのね」
「あぁ。本当に済まないとは思っている。今でさえこれだ。俺の寿命も長くはないな」
「そんな！やめてよ！」
「工藤君は、まだ死なへん！！」
「だけど、これまでに一体何発喰らったと思う？灰原に向かって撃

たれた数で１５発以上。蘭で五発以上。合計二十発以上を喰らったわけだ。俺の意識は鮮明だけれど、かなり体中が痛い」

そう。これは本当のこと。

俺は今まで二・三発を見逃しただけで、残りの全部の弾を体で受け止めている。

本当に、痛みは激しい。多分、足を地に着けることも不可能だろう。

そのとき。後方で足音が聞こえる。

それに気がついたのか、蘭と和葉ちゃんは同時に走り出す。

「来たんやな」

「うん。三人もいるの。一人は…えっと新一、誰だっけ？」

「帽子を深く被って髪が長いのが、ジン。そして、小学二年生ぐらいの身長で、赤紫色の髪の毛をしたのが紅。そして、金髪で、髪が長い奴がベルモット。もう一人、ウォッカって奴がいるけど、今は服部と灰原を捜している」

「詳しいなぁ。うち、其処まで覚えることできひんわ」

「其れより急いで！彼奴らの足が速くなっているぞ！」

「う、うん！」

蘭は走る速度を上げる。しかし、蘭は足を負傷しているため、あまり速くは走れない。

畜生！！！解らねぇ！彼奴らは何で執拗に俺を狙うんだ！？

狙いは灰原じゃねぇのか。

彼奴ら、確か「裏切り者には死有るのみ」って言ってただろ。

俺はただ…。でも、待て。

灰原といるのがまずいのか！？いや、俺は灰原を守るために。

まさか…まさか…まさか。

俺の周りにいる奴を片っ端から殺そうって言うのか！？

灰原の周りにいる奴…歩美・光彦・元太等だな。
俺の周りにいる奴…蘭・（おっちゃん・園子）和葉ちゃん・服部後は、灰原の周りにいる三人。
もっと俺の周りにはいると思うけれど、今この状態じゃこれ位しか浮かばない。

そのとき。蘭の足が止まる。

「し…新一」
「どうした！？」
「足が…痛いの。走れない状態に…」
「蘭ちゃんいける！？」

くっそー！！！此処からどうすればいいって言うんだ！！

「でも工藤君。うち、何か引っ掛かるねん」
「何が！？」
「何か…本当の狙いはあの姉ちゃんやった気がするんやけど…何で工藤君や、平治や蘭ちゃんが狙われなあかんのかなって…」
「俺もそう思ったよ。多分…俺の推定だけど…」

そう言って、蘭と和葉の耳に昨期思ったことを全て話した。

「嘘！！！そんなっ！」
「うそやろ！？周りにいる奴を片っ端から消していくって考えやったん！？」
「その通りよ…流石は名探偵」
「紅！！」

其処のには、口の端をあげた紅が立っていた。

「それにしても、其処のポニーテールさん。よく、私たちにばれずに来れたわね。褒めてあげるわ」
「そんな褒め言葉要らんわ！」
「そうカッカしないの。此処でいきなり死ねるんだから、短い間ご苦労様…」

そう言って、和葉の額目掛けて銃を突きつける。
しかし、和葉は一歩も動じない。
蘭が和葉を庇っているからだ。

「あら。また庇い合いかしら？」
「文句有るの！？和葉ちゃんを傷つけるなんて許せない！！！」
「蘭ちゃん！！「蘭！」
「止めろよ蘭！！」

俺はそう言ったが、蘭はもう走り出した。
急いで蘭に手を伸ばしたが

その手が蘭の背中に届くこともなかった――。

第五話　逃げ場のない戦場（前書き）

哀ちゃんが危険な事します（ぁ

第五話　逃げ場のない戦場

「蘭！！！！」

再度叫んだときには、もう遅かった。

蘭は腹辺りから血を流して倒れた。

その光景を見た瞬間、声の出る限りで俺は叫んだ。

「蘭ーーーーー！！！！！！！！」

和葉も蘭を傍によって声を掛ける。

「蘭ちゃん！！！しっかりして！」

「蘭！目を覚ませ！」

「……しん…いち？」

「蘭！」

「よかった……無事だったん…だね。私が…二人を守って…あげられたから…それで…良いよ」

「あかんて、蘭ちゃん！」

「死んだら承知しないからな、蘭」

「新一、私は…多分一緒に…死ねないよ。…今、凄く息苦しい」

「何！？」

息苦しい…？まさか蘭…。

「死ぬつもりなの」

「蘭！！！」

「なら死んだらいいことじゃない」
「紅！！」
「だって…この子達は生きていても無意味なのよ？なら、死んでも良いじゃない」
「あかん！この子は新一君と幸せになる権利があんねや！」
「幸せ？あなた達はまだ子供遊びをしているつもり？世界は闇包まれるべく、滅びるわ。幸せなんて無いのよ！」

幸せなんて無い？んな訳ねぇだろ！
俺は必ず、蘭と一緒に暮らす！そして、幸せになる！

「お前らは…」
「…何よ」
「闇しか見ていないからそんな事が言えるんだろ！！」
「…っ」

図星を突かれたかのように紅は視線をそらした。
此奴は生まれつき、血しか見なかったのだろう。

「ぐっ…」
「蘭！！！」

蘭は、呻き声を漏らした。
そんな顔を見ている俺は辛さに襲われた。

「絶対死ぬな！蘭！」
「…新、一。私――耐えてみせるよ。新一のために」

意識は鮮明になったみたいだが、痛さは治まらないようだ。

「紅！あんたは、光を見てへんねや！光があるって信じてみ！」
「嫌よ！私はこのまま生き続けるわ！」
闇で十分よ、と紅は吐き捨てる。
「本当に良いのか？お前はいつか本当の人間として生まれ変わる日が来る」
「馬鹿？私はとっくに人間になっているわ」
「其れは闇の中での人間に過ぎない。お前は…光の自分……と向かい合わせになって…みろ」
肺を一度ぶち抜かれた所為で、息が荒くなっている。
「光の自分ですって？そんな物幻に過ぎないわ」
「お前には悪魔が取りついている」
「ほぉ…と言うことは私もいると言うことか」
「ジン！」
和葉の前にはジンが、蘭の前には紅、俺の前にはシャロンが。
「取り囲まれてしもたやん」
「しん…いち。どうするの？」
「畜生！！お前ら、紅を暇つぶし相手として使ったんだな！？」
「そう言うわけではないわよ。扱き使っているだけだもの」
扱き使ってる！？此奴は部下何じゃないのか？
俺はだんだんと、息が苦しくなってくる。
肺をぶち抜かれたら三十分程度で死ぬらしい。
頭の場合は即死だけど。

しかし、俺の場合肺をぶち抜かれて早一時間、経っている。
良く此処まで生きたよな…俺。
そのとき、和葉ちゃんが口を開いた。

「……一つだけ聞いてええか？」
「何だ」
「何で…うち等を殺っている訳なん？狙いはあのちっさい姉ちゃんとちゃうの？」
「邪魔者は排除…其れが目的だ。ま、其処の工藤新一も死にかけだがな。良く、肺をぶち抜かれて此処まで耐えたものだな」
「あぁ…蘭の前……で死ねないからな」
「新一！！…無茶しなくて……良いのに」
「大丈夫さ。まだしなねぇよ。お前が生きている限りは……な」

とは言ってみたものの、本当に息が苦しくなっている。
本当に耐えきれるか微妙になってきている。
三方を囲まれ逃げ場をなくす。

……手段が思い付かねぇ！！

サッカーボールは切れてるし、追跡眼鏡は壊れてしまったし、スケボーは置いてきてしまった。

今度こそ為す術がないのかもしれない。
こう言うときに…彼奴が来てくれれば…。
本当は敵かもしれないけれど…今はそんなの関係ない。
白い帽子のお前が…来てくれたら逃げるのは速くなりそうなんだけれどな…。

ま、無理だろうな。

「このまま死ぬか」
「新一！！！「工藤君！」
「覚悟を決めたようね」
「始末するぞ」
「……了解」

そう言って、俺の前に一気に三人が立ちはだかる。
距離は僅か5メートル程しかない。
狙いは心臓らしい。俺は静かに目を閉じる。

「待ってくれ。最後に…やりたいことがあるから良いか？」
「早めにするのよ」
「解ってる…やりたい事って言うのは…蘭と和葉ちゃんを解放してくれるか？」
「……解った。早く行け！」
「新一…」
「工藤君…ええの？」
「二人の命が大事さ。早く服部の元へいけ」
「新一！！！」

やだよと蘭は小さな俺を抱きしめる。
行かないで、とまだ言う。

「新一がいなくなったら…耐えられないよ…！！園子も悲しむよ！」

――知ってる。そんなこと知ってる。

「ならどうして…」
「お前は生きてろ」

「えっ……？」
「工藤君？」
「俺は死ぬことを覚悟してここに来たんだ。なのに、関係の無い蘭たちまで巻き込んだら迷惑もくそもない。だから――逃げて。蘭姉ちゃん」

最後にコナンの声で言ってみる。
これでコナンの声で言うのは最後なのかもしれない。

「蘭姉ちゃんも和葉姉ちゃんも…早く平次兄ちゃんの所に行ってきて。僕は大丈夫――ハッ。コナンの声でこんなことを言うのもきっと最後だぜ」
「懐かしいなぁ…コナン君の声を聞いたん」
「早く…行くんだ。蘭、和葉ちゃん」

二人は覚悟を決めたように、頷いた。
すれ違いざまに蘭は、元気でねと言った。
俺は一瞬吃驚した。

蘭は人に見せずに泣いていたのかもしれない。
心の奥深くで泣いていたのかもしれない。

俺は、また目を閉じる。
服部――お前とライバルで良かった。楽しかったぜ。
伝えたいこと、まだまだあるけど今は言っている暇もなさそうだぜ。

――そのとき。俺の探偵バッジから服部の声が聞こえた。

『工藤！！！大変や！』

「どうした、服部」
『あの姉ちゃんが病室から逃げよったんや！！』
「灰原が！？まだ怪我、完璧に回復してねぇんじゃないのか！？」
『手術の後すぐに眼ぇ覚ましてトイレに行くとか言うたんや。そしたら、なかなか戻ってけぇへんから様子見に行ったら、その姉ちゃんが何処にも居らんかったんや！！』
「まさか、こっちに来ているんじゃ…」
『だから今俺もそっちに行こうと思うてる…和葉！？和葉が何で此処におんねん！』
「俺が解放してもらえるように奴らに頼んだんだ」
『あの姉ちゃんも銃撃喰らったんか！？』
「あぁ、何発か喰らってる。だから、解放を頼んだ」
「工藤君！！！！」
「え？」
『工藤…？今、そっちで工藤君って言う声が…まさか、あの姉ちゃん！？』

俺はぐうの音も出なかった。
本当なら病室で寝ているはずの――彼奴がいたからだ。

第六話　脱出

第六話　脱出

「工藤君！！！」
「はっ…灰原！？どうして此処に！？」

どうしてもこうしてもないわよ、と言い返す灰原。
自分の命も考えた方がマシなはずだ。

「貴方が死にそうって聞いて…大慌てで…来たのよ」
「お前…！！自分の身も考え……えっ？」

気がついてみれば、灰原は俺にしがみついていた。
顔は既に泣いているようだった。
死なないで、と幾度も繰り返すその言葉は何時もの冷淡なる声とは違い、頼りなげだった。
俺は口の端をあげ、バーロと返す。

「これだけ『死ぬな』って言われて、死ぬ奴が何処にいるかってんだ」
「現に貴方が死のうとしたじゃない…！」
「あん？今はそんなことはどうだって良い。守らなきゃいけねーものがあんだ」

――そうだよな？蘭。
元気でねなんて言葉、二度と言わせねーからな。
俺はお前の元に返ってきてやっから。
今度は江戸川コナンの姿ではなく、工藤新一の姿で。

必ずな…。お前の元に。
――そして、灰原。
もう死にたいって想うんじゃねぇ。
お前は明るくこれからの未来を生きていく権利があるんだ。
その権利を失っちゃあ勿体ないぜ？
生きていこうぜ。お前の親友・歩美もそう願ってるはずだから。

「…守らなきゃいけないもの、ね。そう言えば、私にもあるかもしれない」
「お前にはあるだろ。今は居ないけれど、お前が誰よりも大事にしていた明美さん…。組織に射殺されたから…」
「止めて！！これ以上言わないで！」
「ご…御免」

これ以上過去を考えても無駄なのよ、と耳を押さえながら灰原は叫ぶ。

「どうしてだ？」
「どうしてもないわよ。過去に惑わされてばかりじゃあ、意味がないわ」
「……ねぇ。そろそろその長話、終わらない？待ち草臥れたんだけど」
「ホント。長々と十分も話するもんじゃないわよね？」
「終わらせようじゃないか。そこでシェリーと共に滅びるんだ」
「この人達は滅びませんよ。私が居る限りは」
「誰だ！！！！？」

そう言って俺の後ろにあった窓が開き、其処から手が伸び俺たちを抱え込んで外に出る。
白い帽子に、白い服で身を包んだあの男。

「…キッド」
「何時入ろうかと時を窺っておりましたが…。なかなかタイミングが合いませんでしたね」
「どうだって良いけれど、助けてくれたことに礼を言うわ」
「ま、間一髪って所ですか？」
「そうかもしんねーけどよ…まだ終わった訳じゃねぇんだよな」
「えぇ。終わってたらこんなに最悪な空気なんかに、包まれないわよ」
「其れより二人とも。どちらで降りるご予定で？私もこのまま飛んでいるのも些か面倒なんですよ」
「博士の家でおろしてくれたら幸いなんだけど…」
「解りました」

グライダーはまたも加速を始める。
風が頬に当たってかなり痛い。
冬の風を甘く見たら即、終わりみたいなものだ。

そうして数分飛んでグライダーは下に向かっていき、俺たちをおろした。

「助けてくれてサンキューな。まだ傷も痛むし肺もぶち抜かれたから痛いけど…本当にお前に助けられたな」
「いえ。何故か貴方が『助けろ』と言ったような気がしましてね。そこら辺を彷徨いていたら貴方方を発見して、時間を見計らって入って助けたまでですよ」
「それでも私たちには、出るとき怪我も無かったしナイスタイミングよね」
「あぁ。何度も言うけど、今日はサンキューな。敵に助けて貰うのもどうかと想うけどな」

「此処では敵だの、見方だの関係有りませんから…。それでは、失礼します」

そう言って踵を返し、上空に消えた。

本気で礼を言うよ、キッド。

しかし、次の瞬間。胸が苦しくなり、その場にしゃがみ込む。

「工藤君！？」

「大丈夫…だ。これ位…何とも……ない」

「何とも有るじゃない！貴方、肺をぶち抜かれてるんでしょ！？病院に行かないと！」

「しゃーないなぁ…。俺が運んで行こか？」

「服部君…何時の間に…とにかく、お願いできるかしら」

「了解したけどなぁ。よくも病室を平気で抜け出したなぁ。俺らは其れで呆れてるんや」

「そう言われたって私は工藤君がピンチだって言うから、其処まで馳せ参じたのよ？何か間違った事してる？」

「確かにそやけど…」

「はっと…り。これ以上…はいば…らを責めるな」

「お前に言われたらしゃあないなぁ…じゃ、姉ちゃんは温和しゅうあの爺さんの家でまっとれ」

「…解ったわ」

今度はちゃんとＯＫを出した灰原。

お前も…怪我はまともに治ってない筈だ。

俺は死んだって、別に気にすること……あるか。

――蘭。お前は今どうしてる。

和葉ちゃんと、安静にしているか？

お前が元気じゃないと、俺も見ていられないし。
もう少し…待ってろ。今度は必ずお前の元に帰ってきてやっから。
まだ、工藤新一には戻れねぇけどいつか必ず戻って来てやる。

灰原が…解毒剤を完成させるまでは待っててくれ。
灰原も急いでくれているはずだから。

「おい、工藤」
「な…んだ」
「お前なぁ、何人分を庇ったんや」
「さぁな…蘭、と灰原…二人だけだな」
「にしては、けったいな傷やんけ」
「んなもん…知るか…よ。お前…バイクは」
「あぁ？いま、パンク中でなぁ修理してもろてんのや」

病院まであと少し。何故か病院に近づくにつれ、胸の痛みはどんどんと増すのだった。

第六話　脱出（後書き）

今回は一寸短くて御免なさい＜＞

第七話　再会

第七話　再会

私がコナン君こと新一に逃がして貰ってからかれこれ五時間。
どうしてるんだだろうと胸が痛くなる。

私が来た頃にはもう、肺から血が出ていたり、足から、腕からとかなりの傷を負っていた。
私の所為もある。
もっと強ければ…新一が怪我何かしなくたって良かった。
空手の技では到底敵わない、とも解っていた。
なのに……何で私は、空手の技なんかで組織の人に攻撃したんだろう。
しかも、その技は全然通じなくて、銃撃まで喰らいそうになった。

「なぁ蘭ちゃん」
「どうしたの？和葉ちゃん」
「今、平次から電話あったんよ。もうすぐ、此処に工藤君が来るって…でも、かなりの怪我らしいんよ。今、胸が痛いって苦しんでる言うてるって…」
「嘘…！」

その声は病室に響き渡る。和葉ちゃんも黙っている。
そのとき、ドアがノックされる。

「誰やろ…開けてくるわ」
「うん」

そう言って和葉ちゃんは、ドアに手をかけそっと右に動かす。
ドアの外にいたのは、茶髪で背がコナン君とほぼ変わらない背丈の少女。

「…哀ちゃん」
「蘭さん…工藤君が、貴方を呼んでるわ。足、動かせる？彼、胸が痛いだの足が痛いだので、ここに来るのが困難らしいの」
「工藤君、来たんや！蘭ちゃん、あたし支えたるから行こう！」
「うん！」

その声は弾んでいた。やっと、新一に会える。
体がぼろぼろでも、新一は新一。
私がずっと会いたかった、あの人。

あの五時間をどれだけ悲しく過ごしていたか。
新一が元気になったら…。

和葉ちゃんに支えてもらいつつ、新一が待っているというロビーに向かった。
そして、ベットの上で上半身を起こしている。
まだ、包帯で血を止めているだけの状態の小さな新一が見えた。

「…蘭」
「お帰りなさい…新一」
「怪我は、良くなったか？逆に俺は良くならなくてよ。お前は…まだ足が痛むか」
「一寸ね。でも、ご苦労様。それに…私を逃がしてくれて、ありがと」
「…蘭。もう『元気でね』って言葉、お前には言わせねぇ。俺は何

処にも行かない」
「…ご、御免ね。私、新一の気も知らないで…あんな……ことっ」
「な、泣くなよ」

困った様子の新一も知らずに、その場で泣き崩れてしまう。
私は…迷惑をかけすぎたんだと。
新一が悲しんでいるのも知らずに、あんな事を言っていたなんて…。
馬鹿ッ。私の…馬鹿ッ。

「俺は確かにあの言葉には怒りを覚えた。けれど、お前が生きている限りは絶対に死ねねぇって…解ったんだ」
「工藤君は、蘭さんの元に必ず帰るって言ってたわ」
「灰原」
「蘭さんが生きている限り、彼がこの世から消えることなんてないわ。彼、蘭さんのことをきっとこの世で失うことすら出来ないぐらい――」
「は…灰原っ！」

新一は顔を真っ赤にして抗議する。茶化したら、きっとまた『夕日の所為だ』なんて言うんだろうけど。
良かった…新一が助かって。

「ってあれ？そう言えば…」
「どうした、蘭」
「新一って、どうやってあの変な屋敷から抜け出したの？私たちでも抜け出すの、大変だったんだから」

新一の顔に一瞬焦りが浮かんでいたような気がした。
そして、哀ちゃんの方向に視線を向け、口を開く。

「……灰原。言うべきか、これ」
「さぁ？蘭さんが切れることは確かだけれど、聞かれてる限りは答えた方が良いんじゃない？」
「しゃーねーな…。――キッドだよ」
「キッド！！！！！！？」
「なんやと工藤！？あの天下の大怪盗に助けてもろたやと！？」
「嘘やろ！？それ！？」
「いいえ、本当よ。あの怪盗さん、工藤君が助けを求めている気がしただなんて言い出すから、正直吃驚したわ」
「新一！？本当なのっ！？」
「キッドに助けてもらったのは本当だけどよ…助けを求めた覚えはないぜ」
「あら。サンキューな、とか言ったのは何処の誰だったかしらね」

ちげーよ、とまたもや顔を真っ赤にして言う新一をよそに私は微笑んでた。
キッドは嫌いだけれど、助けてくれたことには感謝する。
ほっとしたのか、また涙が浮かぶ。
新一は助かったのだと、もういなくならないのだと。
私は涙を拭き取った。新一を、これ以上悲しませたくない。

「工藤君、これ」
「ん？何だこれ」
「あら。貴方が長い間待ちわびた物よ？」
「出来た…のか？」
「えぇ。完成よ。手術が終わったら飲みなさい」
「あぁ、そうするよ。サンキューな灰原」
「いいえ。貴方が頼んだことだもの。いつかやり遂げようと想っていたから」

哀ちゃんは、手のひらに乗せた小さなカプセルを新一に手渡した。
あれが、妙な薬の解毒剤なんだよね。

「本当に、サンキュ。灰原」
「良いって言ってるでしょ。ついでに…私も戻ろうと想うの」

その言葉を聞いたとたん私はえっと言う。
哀ちゃんも新一と同じだったの？と

「あら。知らなかったの？私は、本名宮野志保。偽名が灰原哀よ」
「志保ちゃんか…良い名前よね」
「そ…そうかしら」

若干顔を赤くする哀ちゃん。
哀ちゃんは、今すぐ飲んで来るみたいで、その場から離れた。
きっと、トイレにでも向かったのだろう。

その後新一も薬を懐にしまい、手術室へと送られた。
そんな後ろ姿を、悲しみを抑えた状態で私は見ていた。

私が入院生活を初めて二ヶ月。
新一の怪我は完全回復したのに、何故か新一の怪我より遙に軽かった、私の傷だけは回復しなかった。
そして今日は、新一が帰ってくる日らしい。

「蘭ちゃん、良かったなぁ。工藤君にやっと会えるんやで」
「うん。私の所に来たらガツン！って言ってやるの『今まで何処に行ってたのよ』ってね」
「それエエやん！あたしも、参加してええかな？」

「良いよ！思いっきり言ってやろ！」
「そうやね！」
病室でそんなことを話した私たち。
そんな話を初めて数分後、ドアをノックする音が聞こえた。
「ん？誰だろう。入って良いよ」
「…蘭さん」
そう言って扉を開けて入ってきたのは、背丈が私と殆ど変わらない女の子。
つい昨期まで、私が哀ちゃんと呼んでいた女の子。
「志保…ちゃん？」
「えぇ。宮野志保。解毒剤がちゃんと出来たみたいで、助かったわ」
「良かったやん、元に戻れて」
「私も一安心したわ…これで、今までの罪を懲役で受けることが出来る」
「志保ちゃん！？まさか、警察に行くの！？」
「えぇ。最初からそのつもりでいたのよ。元に戻ったら、警察に出頭しよう、ってね。私が工藤君を小さくした張本人だってことも全て」
「逮捕されるつもりなん！？」
「そのつもりよ。例え、誰が止めようと私は罪を受けなきゃいけない。――組織の人間だから」
「嘘！？志保ちゃんって、組織の人だったの！？」
「言うの忘れてたわ。私は、元組織の人間で逃げる際に、工藤君と同じ薬を飲んで小さくなった訳よ」
次々と明かされる真実に、私は口をぽかんと開けることしかできな

かった。
志保ちゃんが…あの黒の組織とか言う所の人だった！？元々は私たちより年上！？
もう、頭がくらくらしていた。
ついには倒れそうって時に、志保ちゃんが誰か来たみたいねと若干笑みを浮かべつつ言う。
「…私はこれで失礼するわ」
「ちょ…一寸待ってーな！誰が来たん！？」
「蘭さんには言えないけれど、貴方になら、言えるわ」
そう言って、和葉ちゃんの耳に喋りかける。
たちまち和葉ちゃんの顔は笑みを含むようになった。
「あたしも一寸平次の様子見てくるわ」
「うん。じゃあ、また後でね和葉ちゃん、志保ちゃん」
「えぇ。また後で」
そう言って二人が出て行った後、ドアがノックされる。
はいと一言返事をし、扉が開かれる。
其処に立っていた人間を見て、はっと息を飲み込み、両手で口元を覆った。
そして、同時に涙が溢れた。
「しん…いち」
「只今…蘭」
お帰りなさい、と殆ど涙声の所為で掠れている声で言う。

ガツン！と言いたいけれど、そんな言えるどころじゃない。

「ようやく…戻れたのね、新一。待ってたんだから」
「本当に…御免。事件だなんて偽り語って」
「気にしてないよ。ただ、早く帰ってきてほしいなって…」
「大丈夫…俺は事件の時以外、もう何処にも行かない。信じてろ」

そう言って、私を腕の中に収める新一。
腕の中は、吃驚するほど暖かった。
信じていたいよ…と言うより現に信じてたよ。
何処にも行くはずがないって…必ず戻ってきてくれるって。

「私だって…信じてるからね。新一のこと」
「あぁ。…だから、もう泣くな」

私を話した、新一の指が私の眼の下に滑る。
生憎ハンカチ、持ってくるの忘れてなと苦笑を漏らす。

「お前が泣いている顔…見てるだけでこっちが辛くなっちまう。だから…」
「そう言う新一も、人に見せずに泣いていたこともあったんじゃない？コナン君の頃」
「あぁ。有ったよ。『どうして俺は蘭を守ってやれるような大きい奴じゃなくて、小さい奴なんだ』と。早く戻って蘭を守ってやりたいってな」
「本当に…迷惑かけてて……御免ね…しん…いちっ」
「だーかーらー。もう泣くなって言ったろ」
「解ってるけど…新一が戻ってきたって想うと安心して…涙、止まらなくって」
「ホンマ、仲エエなぁ。羨ましいわ」

和葉ちゃん、と涙で赤くなった眼その姿を見つける。
「そろそろ、結婚を考えても良い年頃じゃないの？」
「ま…まだ早いっつーの！俺、告白もしてねぇし！」
「新一？」
「うわっ！しまった！」
「工藤君ったら、すぐに口滑らすのね。前の頃もよく口、滑らせて癖に」
「うっ…うるせーな！」
「ま、精々頑張りなさい。貴方の告白なら即、蘭さんもＯＫする筈よ。そうよね？蘭さん」
「えっ！？そう言われても…少し考えるかな？」
「まったそんなこと言って！蘭ちゃん！早めに結婚とか考えときや？あたしはもう、平次に『結婚してくれ』って言われてしもたし」
「次から次へと結婚相手が出来てるわね。ま、私はきっと結婚なんてできっこないけど。やるとしたら、円谷君辺りかしら」
「光彦！？」

うっわー珍しと新一が言えば、何か文句ある？という志保ちゃんの鋭い返事が。
円谷君って、あの一見真面目そうな男の子よね。
って凄く年離れてない！？と想う。

「あ、宮野。どうするんだ？元太とか光彦とか歩美ちゃん達に…」
「あら。もうその事ならとっくに全て話したわ。本当のことを全てね」
「ってことは…」
「えぇ。貴方が元江戸川コナンで、本名工藤新一だってこともあの子たちは知っているわ」

「お前って本当にべらべら喋るよな」
「貴方に言われる筋合いなんてないわよ」
「な……っ！？」
「あら。鋭い突っ込みをいれてショックだったかしら」
「お前の突っ込み方は最悪なんだよ。マジでどうにかしろよ」
「次同じことを言ってみなさい。どうなるか……覚えてなさい」

志保ちゃんの顔は若干怒り気味で怖かった。
うわ、こえーと言う新一の顔もあった。
それは茶化す訳でもなく、本当に怖がっているようだった。
博士の所に行ってくる、そう言って席を外した志保ちゃん。
和葉ちゃんは、服部君と共に大阪に帰るって言っていた。
私は暫く、足を療養することになっている。
予想以上に傷は深かったらしく、新一が治るよりも遙に遅くに治ることになってしまった。

第七話　再会（後書き）

…もうすぐエンドかも。

第八話　まだ遠い平和（前書き）

そろそろまともに可笑しい所が出てくるかもしれません＜＞

第八話　まだ遠い平和

蘭の足が治って半年が過ぎた。
学校に行けば、園子たちが騒ぐし、博士の家に行くと歩美達が騒ぎ出す、更に灰原こと宮野には茶化されて俺は本気で大変だった。
そして、俺が戻ってきたのが噂になってまた事件の電話が殺到した。
いつもなら、また事件！？と怒り出す蘭だが、今回からはちゃんと笑顔で見送るといった蘭は毎度行ってらっしゃいと俺を見送る。

「はぁー…」
「どうした工藤。お前、元気ないな」
「どうしたもこうしたもねぇよ。昨日事件電話が十件ぐらい来てよー。其れで全部解き終えて家に戻ったら夜中の二時と来た。結局、四時間しか寝れなかった訳だ」
「流石東の名探偵だな。事件電話殺到じゃねぇか」
「ま、工藤のことだし。これからも頑張れよっ！毛利のことも含めて！」
「あぁ！？今なんか変な一言多かったよな！？」

俺は友達の言った最後の一言にぶちんと来た。
何で蘭のことまでっ。

「それより聞いたか？何か、宮野志保って奴が警察に逮捕されたって」
「なんだと！？」

俺は机を叩いて立ち上がる。
どうしたんだ？工藤という言葉を無視して俺は震えた。
灰原…！テメェ！マジで行きやがったな！

俺の体の震えは止まらなかった。

「それによ、工藤。また黒の組織って奴が人殺しだってよ」
「また？何度もあったのか？」
「あぁ、過去に数回合ったぜ」

くそ…平和はまだ来ないのかよ。
あの悪魔みたいな奴らはまだ居たのかよ。
ま、俺らが逃げたから当たり前だけどな。

「ねぇ新一」
「どうした、蘭」
「志保ちゃん…逮捕されたって本当？」
「あぁ。聞いたところではそんな感じだな」
「提案なんだけど……今日、警察に行って志保ちゃんに会わない？」
「え？」
「だって…新一を守ろうとして重傷を負ったりして、私まで庇ってもらった感じよ。お礼も含めて会いに行こう？」

本当に蘭は、優しい奴だなと想いながら分かったと言った。
灰原は、本当に逮捕されちまったのか。何となく、寂しい気がする。

そして、部活も終わった放課後。
俺と蘭は、灰原に会うために警察署へと向かった。

「おぉ！工藤君ではないか！」
「どうも、目暮警部。この署に、宮野志保という人はいらっしゃいますか？」
「あぁいるよ。自分で私は黒の組織の人間だ、逮捕してくれと言っ

てきたんだよ」
「その人物の部屋は、何処でしょうか？」
「案内しよう」

そう言って目暮警部の案内のもと、灰原の居る部屋へと足を運ぶ。
ゆっくりと鉄のドアが開かれる。
俺らに気がついたのか、灰原は顔を上げた。

「…工藤君に蘭さん」
「灰原。テメェなんで逮捕されてるんだ！」
「あら。言ったじゃない。警察に出頭するってね」
「志保ちゃんは、本当に懲役を受けるつもりなの！？」
「えぇ。蘭さんや工藤君には悲しい思いをさせるけど、これは私が考えた事。変える事は出来ないわ」
「…灰原。警部に頼んでお前を釈放してもらう」
「何で…！？」
「お前が居ないと組織も来ない。まだ、決着は付いてねぇんだ」

でも…と灰原は声を曇らせる。
そのとき、隣に座っていた蘭が頭を下げた。

「志保ちゃん。私からも、お願い。新一は、志保ちゃんの事を考えているのよ。貴方が助かる事を前提にして」
「……本当に釈放してほしいと想ってる？」
「えぇ、想ってるわ。志保ちゃんも今の時代を楽しく生きて行かなきゃ！ね？」

暫く黙っていた灰原だが、ふっと笑い仕方がないわねと言った。
協力してあげるわと付け足す。
俺は、目暮警部に頼み灰原を釈放してもらった。

「それにしても、何で私を止めたのよ工藤君」
「あ？お前が居なくなれば、歩美達も含めたみんなが困るだろ」
「そうだよ。博士も困っちゃうじゃない？」
「…そうかもしれないわね」

そう言って小さく笑う灰原。
彼女にとって今の言葉は、一番最高な賛同の言葉だろう。

「ねぇ工藤君。お願い、していいかしら」
「何だ？」
「ま、単純な事なんだけれど博士の家に寄ってくれない？」
「あ、あぁ構わねぇぜ」
「博士の家なんて久しぶりね。志保ちゃんも久しぶりに行きたくなったの？」
「まぁ、そんな所ね。あの子たちにも顔を見せておきたいしね」
「そういや、そうだな。俺、この姿に戻ってから一度も顔を見せてねぇ」

歩美達はもう小学二年生に進級している。俺と蘭も高校三年生に進学。
今の年代なら、灰原は大学一年の筈だが大学に行きそうな奴じゃないし。
面倒だから嫌よ、とでも行って突っぱねられそうだな。
そう想っている内に博士の家に着く。

「久しぶりね、此処」
「あぁ。何となく懐かしいな」

そう言って、家の扉を開ける。

其処には予想通り、二年に進学した彼奴らが居た。

「あ、コナン君！哀ちゃん！久しぶり！それに蘭さんも！」
「どう？工藤君。一応前の名前で呼んでって言って正解だったでしょ」
「そんな事初耳だぜ？」
「…言ってなかったような気がするわね」
「おい、コナン！何ぶつぶつ言ってるんだよ！寒いからあがれよ！」
「そうですよ！今、ちょうどみんなで紅茶飲もうって話になってたんですよ」

何でそう紅茶に限るのかと聞きたかったが、敢えてその質問を飲み込んだ。
俺らは博士邸にあがり、紅茶をもらった。

「あの灰原さん。本名は確か宮野志保さんだったんですけど、一度逮捕されたって本当ですか！？」
「そうそう、歩美も新聞見てびっくりしたよ！宮野志保が逮捕されたって書いてあるから」
「そうだぞ！俺らすっげー心配したんだからな！」
「ま、良いじゃない。こうして工藤君と蘭さんの説得によって私は帰ってきたのよ」
「ったく、此奴はすぐに警察に出頭したがる」
「新一！そんな事言ってたら駄目でしょ！」
「…工藤君。本当に例の事するわよ？」
「うわっ！それだけはマジで勘弁してくれよ！」

これで何度目だと想ってるのよ、とジト目で見られる。
3度目だなと軽く返す俺。そして、その後に態とらしい溜息。

「それにしてもみんな元気で良かった。私も、最近博士の家に来なかったしね」
「蘭さんが来たのって随分久しぶりよね！歩美達待ってたんだからね！」
「おう！大分前にはかき氷貰ったしな！」
「おいおい元太。お前そんな事しか覚えてないのかよ」
「ほんっとうに、食べ物の事になると記憶力が良くなるのね。小嶋君は」
「えへへ。俺ってそう言う奴だから」

認めてどうする！と言う全員の突っ込み。
そうした後、みんなで笑った。
そのとき、地下室で何かしていた博士があがってきた。

「おぉ新一に哀君！久しぶりじゃの！蘭君も！」
「久しぶりね、博士」
「ホントだな。ま、相変わらず何か作ってたみてーだけどな」
「いやぁ、新一の眼鏡が壊れてしまっての。其れで修理しておったのじゃ。じゃが、こうして本物が戻ってきてしまったから、眼鏡は要らん様じゃの」
「あぁ残念だけど、俺は視力はそんなに悪かねぇし」
「あの新一さん！一回その眼鏡、かけてみて！コナン君に見えるかもしれない！」
「そうですよ！一回で良いですから！」

うーんと悩む俺にかけてみたら？と蘭や灰原。
仕方なしにその眼鏡を受け取ってかけてみる。
…度がきついなと今更ながら想う。

「うわぁ！コナンみたいだ！」

「ホントです！コナン君が戻ってきたみたいな感じです！」
「…懐かしいね。コナン君がいた頃」
そう言って切なそうに思い出す蘭。
ふと、灰原の方をみると体が震えている。

「灰原っ！？」
「来てる…この近くに、奴らがっ！」
「奴らって…まさか…」
「えぇ。組織の……連中よ」
「え！？組織ってあの辺な黒い帽子を被った二人組ですか？僕たちの腕を拳銃で撃った人たちですか？」
「あぁ。俺もひっでぇ怪我したしな」
「また来たの！？怖いって！」

畜生。また、懲りずにここに来たか！と想って下唇をかむ。
蘭が俺の服の袖を引っ張る。
その顔は如何にも、行かないでと言っているようだった。
でも、蘭が言った事は違った。

「私も行く」

何！？と俺は声を上げる。
付いていくからと蘭は俺に凄むがあまりにも危険すぎる。

「残念だけど、断るよ蘭」
「どうして…」
「前の時は手緩すぎたんだ。彼奴らにしては弱腰だった。もっと過酷にしてくると想う」

だからお前は来るな、巻き込みたくないと俺は言う。
しかし蘭は嫌！と言う。

「これ以上新一を怪我させたくない！！もうあんな新一…見たくない」

最後にそう呟いた後、蘭は涙を流す。
そして、掠れた声でこういった。

「また…待たされるの？」

その言葉で俺は、はっとする。
今まで、何度蘭を待たせた事か。

これ以上待ちたくないのだ、きっと。
正直待たせたくはないと想っていたが…待たせる羽目になるだろう。

…また、過酷になった悪魔が俺に襲ってくる。

第九話　無茶だけど　叶えてみたい（前書き）

若干文章が短くなりました。
御免なさい＞＜

第九話　無茶だけど　叶えてみたい

第九話　無茶だけど　叶えてみたい

どれだけ倒したって悪魔は舞い戻る。
そう。あのカラスの軍団も同じ筈。

「…工藤君。どうするの、また行くの？」
「行くっきゃねぇだろ。お前は…逃げるつもりなのか？」
「逃げはしないわよ。逆に私が囮でしょ？」
「いやそんな事したらお前が死ぬ。そんなのは俺が許さねぇ」
「またそんな事。貴方は庇い過ぎよ。限度って物を考えなさい」

知るかよと工藤君は言う。
知るかよ、の一言で住むなら話は別よと私も反論してしまう。

宮野志保に戻った今、組織には９９％私の事がばれている。
新聞に載ったぐらいだし、目立った事よ。
これで組織は私の居場所を確定したはず。

裏切り者として、死ぬ日が近づいているのかもしれない。

「灰原？」
「…何でもないわ、どうしたの？工藤君」

平静を装って普通に答える。

「いや、最近お前変だなって」
「あら。私は普通よ」

「そうだよな」

そう言って、また博士としゃべり出す工藤君。

どうしたら良いのだろう。
このまま死ぬしか無いのかもしれない。
組織を裏切った人間として、死ぬしか選択肢はない。
逃げられない。もう囲まれている。

四方八方全てを囲まれているような物だ。
何れ、追いつめられてお姉ちゃんと同じように殺されてしまう。

元はと言えば、ジン達がお姉ちゃんを殺したから。
私が、一番大事にしてきたお姉ちゃんを射殺した。
その怨みがあって、逃げ出した…だけなのに。

「…ら…ばら…灰原！」
「えっ？な…何、工藤君」
「お前、やっぱり変だぞ？何かあったのか？」
「いいえ。考え事よ」
「……そうだ。お前に謝まんないと」
「…何を？」

明美さんを守れなくて御免、と彼は心底申し訳なさそうな顔で謝った。
もっと早く、からくりに気がついていれば、明美さんは生きていたはずなんだと言葉が止まりそうにもない。

「いいえ…貴方が悪い訳じゃない」
「じゃあ、一体誰が」

「からくりの問題じゃない。お姉ちゃんを殺そうとしたジン達よ。お姉ちゃんを…返してほしいのよ。絶対に出来ない願いだとも分かっている、お姉ちゃんに会いたいの」

無茶すぎる願い。既にこの世にいない姉に会いたい。

「……無茶だけど、会えるだろ。あの場所にいつか行けば、会えるぞ」

あの場所でもう分かる。姿は見れないけれど…会えるような気がする。

でも、組織の連中が来てそうで、いけない。

あんな冷酷非情な人間が、何処で私を見ているかなんて見当も付かない。

もう…すぐ近くにいるのかもしれない。

無茶だらこそ、叶えたい願い。

お姉ちゃんを…今までずっと大切にしてきたお姉ちゃんを――。

「灰原！お前、何があったんだよ！俺には言えねぇことなのか！？」

「えぇ。言えないわ」

組織のことを考えていたなんて…お姉ちゃんのことを考えていたなんて…。

工藤君に言うつもりもない。言えるわけがない。

忘れろ、とそんな返事が返ってくるような気がした。

何もかも忘れろ、今は今の世界に集中しろと。

ダメだ…絶対に言えない。

私が口を滑らそうとしても、言えない。

お姉ちゃんを返して、なんて。

無茶な願いでもしも叶うなら、其れしかない。
早く、私をずっと大切にしてくれたお姉ちゃんを帰してと。
無茶だろうが関係ない。私には叶えたいことがある。
それだけをずっと願いたい。

工藤君は、叶えたいことを叶えきった。
蘭さんの所に帰りたい、その願いが叶った。
でも……私の願いだけは。

どうして受け入れてくれないの。
私の願いをどうして…。会いたいのに…

「志保ちゃん」
「どうしたの？蘭さん」
「一寸無性に聞きたくなったけど…志保ちゃんに叶えたい事って有る？無理矢理な願いだとしても」
「……お姉ちゃんを返してほしい」
「灰原！」
「今まで私を大切にしてきてくれた。なのに…なのに…何の理由も無しに組織に殺されて…」
「志保ちゃんのお姉さんって…亡くなってたの？」
「えぇ。だから私は組織を抜けたのよ」
「…灰原。お前は叶えたいこと、それだけか？」
「えぇそれだけよ」
「今を一生懸命生きようとか想わないのか！？」
「想いもしない。先ずはお姉ちゃんに会いたい。其れが先。……貴方が邪魔をするようなら私は許さない。『忘れろ』なんて言葉言ってみなさい。絶対に許さない」

工藤君は、図星を突かれたような顔をした。
やっぱり言おうとしたんじゃないのと言葉を重ねる。

私は、外へ行く扉を開け外に出る。工藤君は私を止めなかった。
「行くな」と言う言葉も聞こえなかった。
何処に行くのかも分からず、只歩いた。
工藤君がおってくるような足音もない。

言いすぎたとも思わない。
言いたいことをズバズバと言っただけ。

私の言いたいことはあれだけだった。
邪魔をするなら許さない…それだけだった。
私が死を賭けてまで大切な人を取り戻したい……其れを邪魔するなんて絶対許さない。

「私の夢は…儚い物なのかしら」

そう言って空を仰ぐ。
無数の星が、瞬いている。
この中に、お姉ちゃんがいると良いなと子供らしい考え。

でも…居たらそれだけ嬉しい。
お姉ちゃん…今、何処にいる？

第十話　蘭（前書き）

えー無駄に長いです（ちょ

第十話　蘭

俺は…彼奴に何をしたかったんだ。
ただ「忘れろ」と言いたかっただけなのかもしれない。
これ以上、彼奴に負担をかけさせたくはない。
そう願っているだけ…な筈なのに。

俺は灰原に何をしてしまったんだ。
傷つけたのか？彼奴の全てを崩してしまったのか？

「……新一」
「何だ、蘭」
「追わなくて良かったの？」
「え…？」
「志保ちゃん…何かを思い詰めているようだった。お姉さんのことを…きっと――」
「分かってる。……今は彼奴一人で動く時間なんだろうな」
「本当に其れで良いの？」

後悔しないの？志保ちゃんを困らせてるんだよ？と蘭の言葉が俺を胸を突き刺す。

「…良くないことは分かってる。でも…彼奴は分かってないんだ。
……何にも」
「どういう事…？」
「お前には分からない…俺と彼奴にしかきっと分からない」
「…そう」
「俺……灰原を追いかけてくる」
「帰ってこないと、承知しないから」

「…わーってる」
笑顔で返し、扉を勢いよく開け彼奴を追いかける。
後ろ姿は視界の隅の方に見えていた。
「灰原っ！！！」
小さく見えたその姿は、止まってこちらを振り向く。
俺は、その止まった姿に向かってどんどん走った。
そして、その姿の目の前まで来て、もう一度灰原と呼んでみる。
「……来ないで」
いきなりその言葉が俺を驚愕させた。
「貴方は忘れろと言いたかったんでしょ。そんな人は許さないって言ったはず。……来ないで」
「何で組織に行くって事…いわねぇんだ」
「えっ？」
「組織に行くことぐらい…分かってる。探偵を嘗めるな」
「……ちっ違うわよ」
「違わないだろ？お前は、明美さんを殺した彼奴らを自分の手で殺りたいんだろ」
「……分かってるのね」
「あぁ……だか…ら？」
「御免なさい……っ」
泣くなよ、と俺は若干慌てる。
彼女は一旦、泣きやんだかと想った。
しかし次の瞬間、俺の体に重みを感じた。

灰原が俺に抱きついてきたのだ。

「……御免なさい…っ」

「だーかーらもう泣くなって」

「…御免なさい。こんな所、蘭さんに見せられないわね」

俺から離れた後、苦笑混じりに灰原は言う。

幸い、蘭は来ていないから良かった。

来ていれば、空手チョップだの回し蹴りだの喰らいそうだ。

それ以前に、灰原が軽蔑される。

「ま、帰ろうぜ？」

「そうね。時間も遅いし。私も眠いわ」

そう言って、方向を変えて俺たちは歩き出す。

昨期の鋭い表情は何処へ消えたのだろう。

いつの間にか彼奴の顔は、和らいでいた。

博士の家へ着いた頃。まだ、元太達は起きて何か相談していた。

「お前ら、何相談してんだ？もうすぐ夜中の一時だぞ」

「あ、お帰り新一さん！実はね…この新聞記事」

そう言って歩美から手渡された記事を手に取る。

灰原ものぞき込んで一緒に見てみる。

「…灰原？」

「これ。組織の記事よ」

「何！？」

「また、人を殺したみたいね。こんな情報を聞くの、何度目かしら」
「灰原さんと新一さんは、この記事に見覚えとか有るんですか？」
「えぇ。多少は」
「俺の場合はしょっちゅうだけどな」
灰原は歩美達に新聞を返す。そして、また何かを話し出す。
「おいコナン…じゃないんだった。まぁいっか。で、コナン達は、またその組織とか言うところに行くつもりなのか？」
「……言った方が良いのか？」
「無理矢理には頼みませんけど…僕たちも少しは情報を」
「止めておきなさい」
得ておきたいんですと光彦が言おうとしたところを、灰原の醒めた声が制する。
そして、再度止めておきなさいと言った。
「どうしてですか？」
「貴方達が勝つことは不可能なの。私が危険な情報を持っていることも、奴らは知っている。この場で貴方達の力を借りたとしても」
無駄なのよと一笑する。俺自身もその考えには賛成できた。
小学生の歩美達が、この情報を知って何になるのか。何の利益にもならない。
「それでも、私たちは力になりたいの！新一さんも、哀ちゃんも今後のことで凄く苦しんでいるのは分かってるの！歩美達が、出来る限りのことをして助けてあげたい」
「…その考えを受け入れることは、出来ない。工藤君も同じ考えよ」
「あぁ。前回の対決で分かっただろ。お前らの力で勝てるような相

手じゃない。それに――」
「工藤君は、あの組織達に決着を付けたいのよ。彼奴らが、工藤君に薬を飲ませて江戸川コナンの姿にさせたこと…その他全てについて彼は決着を付けたい、そう思っているわ」
灰原の声を境に、空気は一気に冷たくなる。
歩美・元太・光彦は俯いたまま黙っている。
「…でもよ」
口火を切ったのは、元太。
「俺たちは仲間なんだぞ？信用出来ねぇってか！？今まで頑張って難事件を解決してきただろ！？お前らは仲間って存在がいやなのか！？」
「そうです！今まで一生懸命頑張って来たじゃないですか」
「年の差を考えなさい」
「え？」
「私だって実際は工藤君より年上。工藤君は貴方達よりも絶対年上。考え方が合わない可能性も高い。それでも、まだ仲間を信じろって言うの」
「考えが合わなくたって良い！今まで通りに楽しくやっていきたいの！」
「……鷹が其れだけだなんて下らないわ」
そう言って、研究室の方に灰原は足を運んでいく。
彼奴は楽しくやっていけるような環境に生まれていない。きっとその考えから…。
「灰原…」

俺はそう呟くことしかできなかった。
灰原には、同感できることが幾つかあったからなのかもしれない。

「コナン！！」

昔の名前で呼ばれつつも、元太の方を振り返る。

「コナンはどうしたいんだよ！俺たちと協力したいのか！？」
「そうですよ！灰原さんがダメなら後は貴方しかいないんですよ！」
「…灰原には同感できる。悪いことは言わない。お前らは下がってろ」
「新一さんも其れ！？歩美達は…昔のようになれないの？」
「いつかは戻るさ。でも、其れとこれは別。俺は決着を付けたい。彼奴らをこの手でやっつけたいんだ」
「…分かりました。何が何でも、僕たちは行きます」

行くなともう一度止める。

「協力したくない人に止められても聞かない！歩美達は何が何でもあの人達を止めてみせる！」
「そうだ！少年探偵団の底力を見せてやるんだ！！」

俺はもう物が言えなかった。完璧に彼奴らは組織に行く。
そう分かった。俺は、分かったよと只一言言って、つい昨期灰原が言った地下の研究室へと足を運んだ。

「…灰原、入って良いか」
「えぇ良いわ」

すんなりと了承を得て、俺は扉を開ける。

「…大変なの」

ドアを閉めて早々、灰原は青ざめた表情で言った。
何がと俺は聞き返す。その口から何が吐かれるか、些か緊張していた。

「…蘭さんが、組織の所へ一人で向かったらしいの。そこで、組織にとらえられてる」
「何だと！？組織から電話が来たのか！？」
「えぇ。幸い、貴方の蝶ネクタイ型変声機が有ったから、それを使って、工藤新一に声を変わらせて貰ったけれどね。とにかく急ぎなさい。あと十分以内に来ないと蘭さんの身が危ない！」
「分かった」

俺は勢いよく扉を開け、扉まで続く道を全力疾走で走っていった。

――新一さん！？

そんな声が聞こえたような気がしたが、俺の耳には届いていない。
無我夢中で走る。もう、横なんて見えない。

蘭は何をしたかったんだ。俺を庇う為じゃ有るまいし…
そう思ったとき、俺の携帯の着信音が鳴り響く。
恐る恐るもしもしと返答する。

『し…新一』
「蘭！？」
『御免ね…新一の負担を減らそうと想ってこんな事』

「馬鹿！お前が危険だろ！今どこにいる！」
『組織の地下二階の何処かの部屋…何処かは分からないの。本当に御免ね、御免ね新一』
「謝んな。今から助けに行ってやっから。待ってろ、蘭」
『うん…。最後に一つ、聞いて良い？』
「何だ？」
『私…新一のこと、信じてて良いの？』
「…あぁ。信じてろ。ぜってーお前の所に行く。そして、助けてやる」
『分かった。じゃ…頼むね』

そう言って、静かに電話は切られた。俺の負担を減らすため…か。
馬鹿野郎。蘭の方もヤバイってのに。
俺は走る速度を速める。昨期より、何倍も何倍も。
一重に、蘭を救うため。今までずっと俺のことを見てきてくれた蘭を助けるため。

――待ってろ。必ず行くからな、蘭。

助けて…其処からどうする？組織と真っ向勝負になるのか？
それともそのまま逃げ切れるか…？
分からない。未来は予想できない。

先ずは、蘭が助かるためにそのまま逃げることを図らないと。
そうでもしないと、蘭が危険だ。

走ること十分。お目当ての場所を目の前にして、あの時の過酷すぎる勝負を思い出す。
でも俺は首を左右に振り、迷路のような建物の中に入っていった。

其処の階段を二回下り、部屋中を開けていく。
全て部屋の鍵が開いていたのが全ての幸いだったのかもしれない。
探していない最後の部屋を目の前にした俺は、息切れモードだった。

これで、まともに喋れるのか、逃げることは可能なのかと。
そんな事を気にしつつ、扉を開ける。

「誰！！」

鋭い声が向こうにある闇から聞こえる。
でも、小さい頃から何度も聞いてきた声だ。

「蘭。俺だ」
「新一！！！」

闇の奥の方に蘭の声が、響き渡りその方向に俺も歩を進める。
灯りがようやく蘭を照らしたかと想うと、縄で縛られている姿が目に入った。

「縄で縛られてたのか！？今すぐ解くから待ってろ！」
「御免ね。怪我までさせたよね…。私を助けるのに」
「え？怪我…？」

ほら其処、と蘭が指さした先には何時怪我したのか分からないような傷跡が手の甲にあった。
血も流れていて自分で見ているのも痛々しい。

「御免ね…御免ね！新一！」

「バーロ。捕まった蘭が悪い訳じゃねぇよ。俺が蘭から眼を離す事さえしなければ、お前は捕まらずに済んだのに…俺が眼を離したから」
「新一」
「どうした？蘭」
「一人で抱え込まないで？抱え込んだ苦しみ、私にも頂戴よ。新一一人で悩んでいるなんて考えるだけで辛いよ」
「…サンキュ、蘭。でも、これは自己責任だ。俺が全部もらっとく」
「分かった。あ、早く逃げないと。組織の人たち、来ると想うよ？私を実験しようとして」
「何！？何時だ！！」
「十時半頃だから…あと5分ぐらい？」
「…行くぞ蘭！」

俺は蘭の手を引いて立ち上がるが、直後後ろから痛っという声が聞こえ振り向く。

「蘭！？」
「縄で、足切ったみたい。強く締められてたから…それに、血が出てる。はぁ…馬鹿だな私。此処まで新一に迷惑をかけるなんて」

寂しそうに笑う蘭を、見ている事しかできなかった。そんな俺が少しばかり歯痒かった。
蘭の足が動かせないという事が判明し、組織と真っ向勝負をする事も判明。

――蘭を絶対に無傷で帰還させる。

そう心に決め、組織がくるのを待った。

「また…勝負するの？」
「蘭が足を動かせないとなると、そうするしかないんだ。大丈夫だ、お前を無傷で帰す」
「新一は？新一はどうするの？」
「勝負するから、怪我はするだろ。でも痛くはない」
「どうして？」
「……痛いって言えば、お前が心配するから、だな」
「そんな…言わなくても十分心配だよ」

そのとき、扉を開ける音が聞こえ即俺は蘭を後ろにやり組織がくるのを待っていた。

「工藤新一…また来たな」
「おう。蘭を助けるために来たけれど、生憎足が動かせないみたいだからな。前は偉く弱腰だったし。そろそろ本格的に行こうかなってな」
「フン。今銃も持っていない俺らと真っ向勝負だと？」
「誤魔化すな。お前等はちゃんと銃を持っている…分かってるんだぜ？探偵を嘗めるなよ」

その後、ジャキと言う音が部屋に響き渡る。
俺は蘭の方に腕を伸ばす。そして、俺の方に寄せる。
これ位しか、方法はない。蘭が無傷で帰らせるにはこれ位しか方法はない。

「新一…」
「大丈夫だ。相手はまだ本格的は来ない。その内にお前を帰すから」
「見てられないよ」
「え？」
「辛いよ…前と殆ど同じ光景じゃない！もう新一が傷つくなんて…

止めて！！」

其れと同時に、発砲されるような音が聞こえる。
俺も一瞬吃驚したが、咄嗟に出た行動は蘭を抱きしめ、守る――それだけたった。

背中に痛みが走る。範囲が広いから連続発砲されるかもしれない。
痛みの所為か、顔には汗が滲む。痛いとは言えない。
蘭を庇って負った傷だからそんなのは…痛くも何ともない。

「新一！！！」
「どうした、ら…」

次の瞬間、俺の頭を何かが狙っているのが分かった。
でも、其れが俺の頭に当たる事はなかった。
同時に、何かを跳ね返したような音。
気がつけば、腕の中に蘭はいない。

「毛利蘭…フッ、忘れていたな。貴様は空手をやっていたんだったな…だが、其れが通じるのもいつまでだろうか」
「通じるとは想っていない。ただ、新一を守りたいのよ。…自分の傷が痛いのもあるのに、それでも私を守る思いで守ってくれる新一を」

私を、この世で一番大事にしてきてくれた新一を守らないわけにはいかない。
蘭は一度こちらを振り向いた。
悲しそうな顔には涙さえも浮かんでいた。

「見ていられないのよ…こんなに酷く新一が傷つく瞬間を。前の勝

負だって、私より傷は酷かった。一歩間違えれば、死ぬと言うところまで来た…それでも新一は帰ってきた」
「蘭に…逢いたかったから。ただ、逢いたい一心で闇の淵から、戻って…きたんだ」
「新一！！」
「肺がぶち抜かれて死ぬかと期待していたが…的はずれか」
「…俺はもう死なない。それに…灰原も同じだ」
「シェリーの事か。最近帰ってきたと新聞で見た。貴様は、シェリーの場所を知っているだろ」
「いいや、知らない。何処かでジン達を探しているだろ。きっと、この近くを走り回っているだろうな。さあ、ジン。そろそろ俺は警察を呼ぶつもりだ。其れが嫌なら早く俺等を…？」

脱出させろと言おうとした瞬間、外でパトカーのサイレンの音が聞こえ始めた。
ちっと舌打ちをし、ジンは俺たちの目の前に爆弾を投げつける。

「新一！！」
「くそっ…ジン！！…蘭」
「どうしたの？新一」
「逃げろ…爆発する前に逃げろ！」
「嫌！！新一が死ぬなんて見てられない！！新一が逃げて！」
「無理だ！俺が逃げれば、お前が…！」

そう言った瞬間、爆弾の爆発音が聞こえる。
俺は、無我夢中で蘭の手を引き、走っていた。
火に包まれた建物の中を、ただ走った。

「新一…熱いよ」
「俺も熱い。けど、頑張ろうぜ、蘭」

「…っ」
「蘭！？」
「足の痛み、忘れて走ったみたい。だから、痛みがどんどん増してる…それに、四方八方…火だよ」
「ちっ…囲まれちゃやばいな。蘭、乗れ」

そう言って、俺は蘭をおぶる小さい頃、良くやった物だなと思い出す。
でも。このまま火の中を通れば後は危険なし。
そう思って火の中に行こうとしたとき、火の向こう側から声が聞こえる。

「工藤君！！！」
「灰原？」
「これ着て出てきなさい！」

そう言って火の中を通ってきて入ってきた一枚の白い上着。
俺は其れを頭に被り、火の中を走りきる。

「工藤君！！蘭さん！」
「し…しほちゃ…」

そこで蘭の言葉は跡切れる。
蘭の顔には幾つかの火傷、そして昨期からずっと言ってた縄で足を切った傷跡。

「大丈夫よ。軽い火傷ね」
「助かったぜ灰原」
「いいえ。警察から博士の家に連絡があったの『工藤君が、火に包まれた建物の中にいる』ってね。建物できっと此処だと想ってきて

みたのよ。…警察が止めるのも気にせずにね」
「また危険な事したなお前」
「悪かったわね」
「そんな事より、病院…の前に、出口は？」
「えぇむこ…」

向こうにあるという灰原の言葉の前に、もう一つ爆発音が聞こえる。
そして、建物が崩壊し始める。
一旦、蘭をおろし、辺りを見回す。

「嘘…！」
「マジかよ。これじゃ、逃げるに…」

逃げれないじゃん、と言う俺の声を遮って蘭の悲鳴が聞こえる。

「蘭！？」

蘭の手の上には、火に覆われた柱が倒れている。
蘭の顔は、痛いのを我慢しているような顔があった。
まるで、つい昨期までの俺だ。

「蘭さん！！？今退かすから…待っててて！」
「蘭、暫く我慢してろ！！」

そう言って、二人で柱を持ち上げる。
可成りの重さで手こずったが、最終的には退かす事が出来た。
柱を退かした頃には、驚愕の所為か蘭は気絶していた。

俺等は、建物が崩れていく中歩を進めた。
ただ、誰も死なない事だけを願った。

少なくとも、蘭と灰原は死なせない。
死ぬなら俺自身だ。

「工藤君？」
「あ？どうした」
「いえ。何か変な顔してるから」
「お前もう一寸マシな言い方しろよ。変な顔って…俺は芸をしている訳じゃねぇんだぞ」
「あら。してたんじゃない？有る意味で」
「お前…本当にどうにかしろよ、そう言う言い方」
「…工藤君」
「あー御免！あれだけは絶対勘弁！！」

これで何度目よ、と灰原の鋭い目線が来て俺は後ろに火がある事を分かって一歩後退りした。
だが、そんな灰原の顔も瞬時になくなる。
火の強さがどんどん増していく。外が乾燥してるからかもしれない。

「急ぎましょ。そろそろ、全体に火がわたっているかもしれない…
…いえ、出口は無事よ！」
「おし！急ぐぞ！！」

そう言って、走る。蘭を負ぶっている所為か早さはそんなにでないけれど、出口を目指すため必死になって走った。
出口の光をくぐり抜けたその先には、目暮警部、その他警部達と博士・歩美・元太・光彦それに毛利探偵が来ていた。

「新一君！助かったんじゃな！！」
「あぁ。何とかだけどな」

――俺を助けてくれたのは、お前だろ？な、蘭。
後ろで気絶してしまっている蘭に向かって笑いかける。

「蘭！！！」
「毛利探偵、無理矢理起こさないでください。…気絶してますから」
「何ィっ？気絶だと？」
「だから、病院に連れて行きます」
「くっそー！またもや、探偵ボウズに先を越されたか…！」

いやいや、まず貴方は探偵のような頭脳を持っていないという言葉を必死に飲み込む。
出してしまえばその場でどうなるか…可成り怖くなってくる。

蘭を病院に連れて行く途中は何もなかったから良かった。
病院で手当を受け、病室で目を覚ました蘭に俺は口を開いた。

「無傷で帰してやれなくて御免。蘭を守る権利…無くなっちまったかもな。本当はちゃんと逃げる事が予定だった。でも、組織と向かい合わせになってしまったから…蘭には傷を負わせてしまった。俺が眼を離す事さえしなければ、良かったんだ」
「ううん、良いの。守る権利、ちゃんとあるから。逃げる事が前提なのも分かってた。私が、縄で足なんかを切らなかったら、新一は酷い怪我なんてせずに済んだかもしれない。新一が怪我をする理由なんて、何処にもないのに」
「それだったら、蘭が怪我をする理由も何処にもない」

相子だなと、笑う。

そして、そんな俺も背中を手当てして貰い蘭の隣の方で寝ていた。

いつも話せて、最高なぐらい幸せだった。

ある晩。俺は眠れずに困っていた。病院生活は前回も世話になってるから、だいたいは慣れた。
原因は何か分からないけれど、眠れなかった。
頑張って寝てやろう、と想ったとき俺の携帯が音を鳴らす。
こんな夜中に誰だよ、と言いながら電話に出る。
この時間ならもしかして…と思った。

「もしもし？」
『よぉ工藤！元気しとるか？な訳あれへんやろ！お前また変な事に首突っ込んだな？ニュースも大騒ぎやで』
「其れは良かった…って言ってる場合か！気づいてたらこっちに来いよ！お陰でどんな怪我したのかわかってんのか！？」
『知る気もないわい。じゃ何で俺を呼ばへんねん！』
「暇あるかよ…」
『お前、また姉ちゃんに傷負わせたんとちゃうか』
「負わせて何かねーよ。ただ、そんな気分になるだけだ」
『ほぉ…？お前も姉ちゃんに惚れてる言うしな』
「其れを今此処で出す事か！？」
『ま、エエやんけ。んじゃ、後で見舞いにでも行ったるわ。そこで温和しゅうまっとるんやで』
「俺はチビじゃねーんだぞ！一応高校生だぞ！」
『あーもーわかってるわ！ま、とにかく行くからなっ！』
「おー勝手に来いよ。…この色黒男」
『色黒ー！？お前に言われたないわっ！』

そう言って荒々しく電話は切られる。電話の画面を見て何故か俺はにやついている。
服部の事を考えて、何故かにやつく。

そのとき、と頼りなげな声が俺の右横から聞こえる。

「新一」
「どうした、蘭」
「…眠れないの」
「え？」
「原因が何なのかは分からないけれど…とにかく眠れない」
「俺も…同じかな。病院生活は慣れたのに、眠れなくてよ」
「やっぱり？私も同じだったりするの」

ホント、似てるよねと蘭の鈴を転がしたような声。俺もそうだなと只一言返す。

「蘭。多分、明日ぐらい服部が見舞いに来ると想うぜ。この状態で誤解されねぇよな。恋人だって」
「大丈夫だと思うよ。私たち、まだ恋人じゃないもん。…幼馴染みだから」
「そう…だな」

そう言って、窓から空を見る。

外には、上弦の月が浮かんでいる。
その周りを取り囲むかのように、無数の星が見えた。

「頑張って寝ようか、新一。お休み」
「あぁ、早く治そうぜ。俺の方が傷、酷いけどな…お休み、蘭」

昨期は眠れなかったはずなのに、簡単に眠りにつく事が出来た。
もしかして、蘭と話さないと俺は眠れないのかもしれない。
蘭がいないと俺は、確かに大変なんだ。

いや、いないだけで平常心じゃいられなくなる。
ずっと…このまま居たいんだ。蘭と一緒に…。

第十一話　夢を破壊し者（前書き）

今回は蘭視点です。

第十一話　夢を破壊し者

次の日の朝。私は、鳥のさえずりで目を覚ます。
隣で寝ている新一は、まだ眠っている。
何年間も寝顔なんて見て来たのに…どうして、初めて見るように想うんだろう。
幼馴染みの新一の寝顔、繰り返される呼吸はとても静かだ。

「……蘭？」
「あ、起きた？おはよ、新一。あの後、よく眠れた？」
「あぁ。お前と話さなかったら俺は寝れないみたいだな」
「またそんな事。…怪我は大丈夫？」
「あぁ。結構マシになったぜ。まだひりひりするけどな」
「でも、少しでも良くなっただけ…よかった。治らなかったらどうしようって」
「お前がいる限りは絶対に治るからな」

そうね、と言い終わった後ドアをノックする音。
どうぞと応答した後、人が入ってくる。

「服部君に和葉ちゃん！それに志保ちゃんもみんな！」
「蘭ちゃん！心配したんやで」
「そうよ！蘭が怪我したって言うからダッシュできたんだから！」
「ありがとう。本当に有難う。また、迷惑かけたね」
「エエんよ。問題は、工藤君やな。背中銃で撃たれたって言うやん？」

そう言って私も新一の方を向く。其処には志保ちゃんと少年探偵団

のみんなと服部君がいた。
「ったくほんまに工藤は、次から次へと騒ぎ起こすやっちゃな」
「うるせーこの色黒。騒ぎを起こしたのはワザとじゃねぇんだからよ。其れだけ良いと思え」
そのとき、歩美ちゃんが口を開く。
「…新一さん」
「どうした、歩美」
「あの時…あんな事言って御免なさい」
「あ？あの時の事は大して気にしちゃいねぇから気にするな。灰原もそうだろうし」
「えぇ。私も気にしてはいないわ。小さい子の考えにはついて行けなくて」
「あんのちっさい姉ちゃんが実は俺等より年上ってのが気にくわへんな」
「あら、文句有る？本当の事を貴方に話しただけよ？」
「それより、コナン！どうして協力しようとしなかったんだ？」
「あぁ。ぶっちゃけ灰原と同じ。小さい奴らの考えにはついて行けなかっただけ。俺が江戸川コナンの時も可成り苦労したぜ」
「あー！其れって私たちに喧嘩売ってるの！？」
「そう聞こえるならそう思っておいてくれ」
軽く返し、服部君を呼ぶ新一。
「何や工藤」
「一寸頼み事。耳、貸せ」
そう言って、新一は服部の耳に何かを喋る。

私は隣にいるのに何を言っているのかさっぱりだった。
「はぁ！？あのこと調べろ！？あの変な奴らのか？」
服部君が声を上げた後、和葉ちゃんが私の肩を叩く。
「もしかして、蘭ちゃん。組織の事かもしれへんで？」
「え？黒の組織？」
「工藤君。平次と仲エエやん？いま、入院してるから平次に頼んでるんやろ、きっと」
「へぇ。蘭の旦那って人に頼る癖有るのね」
「旦那じゃないよ園子！！まだ、只の幼馴染みだよ…」
「へぇ～？新一君、きっとその事言い出すと顔を真っ赤にして抵抗すると想うけど～？」
「ホンマや！蘭ちゃん早い所工藤君と、一緒になりぃ？」
「和葉ちゃんみたいに結婚を頼まれた人じゃないの！新一、そう言うの言わないタイプだよ」
逆に突き放されてそうで、辛いよとそんな言葉が私の口から出た。意外だった。今までそんな事を口にした事はなかった。
「大丈夫やて蘭ちゃん！あたし等応援するから！」
「そうよ！私たちを信じて頑張りなさいよ！」
「って言われても、彼奴何時も事件だもん」
「そうやね…あたしみたいやな。平次もいっつも事件や。あたし、平次居らんかったら滅茶寂しいのに」
「園子もそうよね」
「真さんって、色々注意してくるもん！『スカート短い』とかね」
「うわ～其れ激し過ぎちゃう？」
「うん。短かったらダメなのかなって一瞬想う！女の子って、短い

のを履くタイプじゃない？」
「そうだよね。私はあんまり履かないけどね。でも、新一とか服部君はそんな事言わないのに…どうしてだろう。ま、注意したいのも仕方ないかもしれないね」
「うん。でもあたしは、真さんで十分だと想うの！」
「私も新一で十分だよ。これ以上彼氏ほしいとか想わない」
「うちも。平次は何でも分かってくれるし幼馴染みやし？幼馴染みは何でも分かり合ってるから其れだけエエと想うねん」

新一は…どう思ってるんだろう。
私を迷惑って思っているのかな。
新一が、私の所に帰ってきて事件の電話が殺到していて一緒にいれる時間は僅かしかなかった。
其れでも私は新一が事件に行くときは、笑顔で見送った。
逆に目障りと想われているかもしれない。
そう思うと悲しいな…。

「蘭ちゃん？大丈夫？」
「うん。大丈夫！一寸考え事」
「じゃあ、あたし等そろそろ帰るわ！また来るな！はよ、体治しや？」
「そうよ！早く旦那とくっつきなさい！」
「旦那じゃねぇっての」
「新一」
「俺は別に、蘭の旦那になるつもりもない。好きって事もないんだしな」
「工藤も断言するときは断言するんやな。そうズバズバ言っている内に嫌われんで。じゃな！姉ちゃんも早い所治しや」
「うん有難う服部君！じゃね！」

志保ちゃんは暫く残ると言って今度は私の方に来た。

「蘭さん、怪我の方大丈夫？幾つか火傷を負ってたけど」
「うん。平気！志保ちゃんがあの時来てくれなかったら、きっと死んでた」
「工藤君に蘭さんの事を伝えたのも私なの。だから、場所も分かってた。警察から建物が燃えてるって博士の家に電話があったから、急いでいったのよ。警察が止めるのも聞かずに建物に入ったわけ」
「本当に有難う！志保ちゃん！」
「いいえ。助かっただけ良かったわ。当然、工藤君も心から喜んでいるわ」
「そうかな…」
「どうして？工藤君は、貴方を必死の思いで守ってくれたのよ？」
「もしかして迷惑をかけているんじゃないかなって…私の事を迷惑に想っているんじゃないかって」
「思いこみも其処までにしろ、蘭」
「新一」

俺はお前を迷惑とも思っていない、むしろ居ないと俺も平常心でいていられないぐらい大切な存在なんだと。
何時だってお前を見てきた。目に焼き付けてる。
どんな想い出だって、思い出せる。お前といた日がどれだけ大切な物なのか、と。

「お前との想い出は、一つたりとも忘れていない。其れだけお前の存在が俺の中で大きくなって行ってるんだ」
「その通りよ。工藤君は、誰よりも蘭さんを先にする。…其れだけ蘭さんが好きなのよ工藤君は」
「灰原！！「志保ちゃん！！」

志保ちゃんは、くすっと笑う。そして部屋を出て行く。
私は顔の温度が上がっていくのが分かった。

「嘘よね…新一」
「……本当」

確かに正しい事なんだと新一は言う。

「…でも言えなかった」
「どうして？」
「事件に行くたびにお前を苦しめ、悲しませて来た俺が蘭に『好き』って言う権利はないって」
「…あるよ。そんなの幾らでもあげるよ。私の方が…ほしい…の……」

そう言った瞬間、急に意識が遠くなりベット下へと転落する。
――蘭！！！
そんな声が聞こえたような気がしたけれど意識が遠のいた所為で分からなかった。

新一は…悪くないの。
何時も、事件の時無理矢理の笑顔で見送っている私が悪いんだ。

「――ん！らん！！蘭！！！」
「えっ」

私はそんな声を上げて、起きあがった。
良かったと安心した顔の新一が初めに見えた。

「私…一体」
「工藤君の一言で倒れてしまったみたいね」
「あぁ。俺の所為だ……御免。蘭」
「ううん、良いの。変なことで倒れる私が悪いから」
変な事ってどんな事よと心の中で突っ込む。
「…私って、新一が事件に行くたびに偽りの笑顔を作ってた」
「どういう事だ」
「悲しかったんだよ…新一が、いなくなると想うと。泣きたいのに、笑顔で見送らなきゃって…何時も、唱えてたから泣けなかった」
「工藤君も、心の奥深くで泣いていたわ」
「灰原」
「工藤君は、貴方から離れる度に泣いていた。人に見せず、声も出さず只、心の奥深くで泣いていたのよ。只一心に貴方の元へ帰りたいと想ってね」
新一は、何時も一人で闘ってきた。事件というなの、高すぎる壁とずっと闘ってきた。
私は…そんな新一の邪魔をしていたの？
一生懸命頑張っている新一を…傷つけてきたんだ。私の言葉で…傷つけてきたんだ。
なんて…馬鹿なんだろう、此処まで私は我が侭だなんて。
行かないでとその一言が、新一の心に傷を作る原因だったんだ。
いつの間にか涙がこぼれていた。こんなに馬鹿な私が…憎らしくて…ならなかった。
「蘭？」
「何でも…ない」

「……また、迷惑かけた云々考えてただろ」
「ちっ…違う」

言えない…また新一が迷惑する。自分の進むべき道を私が壊していたなんて…。
将来、シャーロック・ホームズみたいになるって言う新一の夢を…全て私が壊してたんだ。
考えてるだけで、辛い。考える私も悪いのかもしれないけれど…やっぱり夢を破壊したのは私なんだ。
どうせ壊すなら…自分の夢を壊すんだった。
大切な人の夢を壊すなんて…以ての外じゃない。

私は何を考えていたのか分からない。
いつの間にか、部屋を飛び出していた。
もう嫌だった。自分のしていることが最悪すぎた。
破壊者の真似事をしていたんだ…私は。
夢の破壊者……そう呼ばれたって良い。正しいことなんだもの。
呼んでほしいと言いたいぐらい…かもしれない。

私はいつの間にか、何処にいるのか分からない街まで来ていた。

第十二話　事件発生（前書き）

やたらと長いです；それと色々設定が可笑しくなってます。
御免なさい＞＜

第十二話　事件発生

蘭が部屋を飛び出した数秒後に、俺も部屋を飛び出していた。
だが、足が速いだけある。俺が外に出た頃には後ろ姿すら、見えなかった。

「何かを思い詰めているようだったわ。蘭さん」
「なんだと？」
「多分…多分だけど…迷惑を掛けていること以上に、激しく貴方のことで思い詰めていることが、彼女の心にあったんだと思う」

でも工藤君なら見つけられる。
彼女と隠れん坊をしていても、見つけることが出来るのは貴方しかいないんだからと灰原は言う。

「そうだな…灰原は、念のため警察に捜査を頼んでおいてくれるか？」
「分かったわ。じゃあ、頑張って」
「あぁ行ってくる」

そう言って、灰原と別れる。
灰原の後ろ姿を見た後、俺は深呼吸をしてあちこちを探し回った。
生憎蘭は携帯を持って行ってない。電話を掛けようにも掛けることが不可能だ。

くそ…！！何処へ行った蘭！！

俺は、先ずは東の方へと足を勧めた。
蘭が何処に行ったのかは全く分からない。

足跡が残っている筈などもない。
東の方へ足を進めて数分ぐらい経った頃だろうか。不意に俺の肩がつかまれた。
何かと思って振り向いてみれば…。

「く…工藤君」
「灰原？」
「蘭さんが…見つかったらしいの。…でも、意識不明な…のよ」
「なにっ！？」
「早く来て！！病院で手当受けてるから！！」

俺の腕を引っ張って、走り出す灰原。それにギリギリついて行ける俺。
蘭が…意識不明だと？何の理由があったんだ！？
まさか…思い詰めていることが意識不明を起こすほど…激しい物だったのか！？

病院に着くと、目暮警部その他の刑事が沢山いた。

「目暮警部。蘭は…蘭はどうなってるんですか！？」
「それが……喋れなくなったみたいなんだ」
「喋れない！？」
「あぁ。手術は成功したらしいが、何かのストレスの所為なのか、喋れなくなっているようだ」
「警部。蘭の部屋は一体何処ですか」
「七階の一番左の病室にいる。今は、君のことを待っている」
「くそっ――蘭！！！」

俺は無我夢中で走り出した。

エレベーターなんて待っていられないから、階段を駆け上がる。
――蘭！！！喋れなくなってなんて聞いて、黙ってられるか！
七階まで来て、一旦呼吸を整える。
流石に長かった。七階まで駆け上がるとなると結構な長距離だ。
毛利蘭と書かれたその部屋を静かに開ける。
全部扉を開けきったとき、口元を手で覆っている蘭が見えた。
「蘭っ！！！」
蘭が喋れないことが分かっていた。けれど、俺はそんなことを振り切って蘭のそばまで行った。
口パクで、新一と言っているのが分かった。
蘭の手元には、紙とペンがあった。しかも紙は、無数に。
御免ねと書かれたその文字を見た俺は、無性に悲しくなった。
声が聞けないと想うと、辛くてならなかった。
「何が…何があったんだよ！！！お前の体に何があったんだよっ！！！」
悔しかった。何も出来なかった自分が悔しい。
「何が原因で悲しんでたのか…分からなかった俺を許してくれ！！」
言葉が止まらなかった。気がつけば、見えてる涙を流していた。
本気で悔しかった。何で自分は何も出来なかったんだと。
そのとき、蘭の手が動いた。

紙には、「新一は何も悪くない。悪いのは全て私なの」と書いてあった。

「ら…ん？」

俺は、その言葉の意味がイマイチ解らなかった。
蘭は俺を見つめて微笑んだ。
その顔は寂しさが含まれているようにも思えた。
俺は何を考えていたのだろう。蘭を抱きしめていた。

「俺は本当に蘭の傍にいて…良いのか？何も分かってやれなくて、結局は蘭をこんな目に遭わせて…悔しすぎる」
「…しん……い…ちは…わる……く…ない」

途切れ途切れに蘭の言葉が聞こえた。

「蘭！お前声が出るようになったのか！」
「何…と…かね。……本当に…御免ね、しん…い……ち。迷惑かけて…こんな事になっ…てまた悲しませて…新一を泣かせて……しまった」

悔しいのは私の方だよ、と。

「…暫く、抱きしめたまんまで良いか？離したくねぇんだよ。離したら…お前が手の中から消えてしまう気がして」
「随分……と弱腰だ……ね、新一。……分かった。少しの間、だけよ？」

蘭の苦しみも、悲しみも、辛い気持ちも吸い取ってやれたらどれだ

け幸せだろう。
でも、其れが出来ないから嫌なんだ。自分が嫌なんだ。
それが…今現在で分かることだ
出来れば、文句なしだ。文句を言う所など一つもない。
あいにくだけど、俺にはそんな力…無いし、持てない。
持つことさえ、禁じられている。
俺は、そんな力を持っちゃいけねぇのか？持てば、罰があるのか？

「しん……い…ち」
「どうした蘭」
「私…新一の苦しみ…とか、吸い取れ…るかな」

蘭？と俺は蘭の言っていることがイマイチ分からなかった。

「新一…は、何時も何時も…事件に専念して、帰ってきた…ら疲れた……ような顔…して」

蘭には何もかも見透かされていた。俺が、事件から帰ってきたら必ず疲れている。
当たり前過ぎて、蘭が何時も見てくれていると忘れていた。

「サンキュ、蘭」

一言礼を述べて、蘭を離した。

「ありがとう」

今度はちゃんと言えてる。跡切れることなく言えてた、聞きたくてならなかった蘭の声。

「何を…思い詰めてたんだ？」
「えっ？」
其れを行った途端、蘭は黙り込む。如何にも言いたくないというような顔をしている。
再度俺は言った、何を思い詰めていたんだ、と。
「言えない」
考えに考えて出しただろうに、答えは言えない…ただ其れだけだった。
俺は、何気に納得できなかった。
何で言えないのか、と。俺じゃダメなのか、と。
「……新一の夢を壊した」
え？と一瞬吃驚する。言えないと言ったものの、やっぱり言うことにしたのだろうか。
俺の夢を壊した？と聞き返す。
「私の言葉が、新一の夢を壊す原因なんだ。『行かないで』とか…無理矢理な事言って新一のシャーロック・ホームズみたいな探偵になるって夢、壊したんだ。仕事の邪魔が、夢を壊す原因なんだよ」
蘭の言葉は正解している。確かに正解している。でも、それ以上に俺には将来なりたいものがあった。
目指す探偵以上に願うことが一つあった。
「…バーロ」

「え？」
「俺は探偵以上に目指す事ぐらいあんだよ」
「…探偵以上に？」
「　　」
「えっ…！？」

蘭の顔はみるみる赤くなっていく。そして、下を向いた。
そりゃあ、吃驚するだろうよ。
「お前を嫁にもらうことだ」なんて言ったしな。

「…しんじらんない！！」

そう言って蘭の拳骨が飛ぶが俺は軽くかわす。

「私はまだ認めないよ。新一の夢を壊してるって意識している間は」
「じゃ、なくなったら其れは其れで俺の嫁になるんだな？」
「何時誰がそんなこと言った？」
「う〝っ…痛いところ突いてくるなお前」
「痛いところ？全然」

平然と笑顔で答える蘭に俺は肩を落とす。
が、次の瞬間胸に苦しみを覚える。

「し…新一！？」

答えることも出来ないぐらい、苦しい。
胸の奥が熱くなる。
体が縮んでいる気が…まさか！

第十三話　光ＶＳ闇（前書き）

こちらもやたらと長いです＾＾；

第十三話　光VS闇

俺は、苦しみに耐えながら病院を飛び出しトイレへと向かう。
コナンに戻る…！そう思った。
永久バージョンの解毒剤じゃなかったのかと思いつつ苦しみに耐えていた。

コナンに戻ってしまったとき、俺に電話がかかってきた。

「もしもし」
『どうなってるか分からないわよ。戻ってしまったみたい』
「そんな俺もコナンに戻ってしまった」
『永久にいけるかと思ったのに…何らかの原因で期限が切れるようになってしまったみたいよ。今、博士の家に来れるなら来てくれる？協力してもらいたいの』
「分かった」

そう言って、ほぼ同時に電話を切った。
何が原因か分からない。誰に何かをされたのかも、何かの原因があってこうなったのかはさっぱり分からない。
ただ、完成と思っていたものが期限切れのものとなってしまった…
其れだけだった。

俺は、蘭に別れを言うのも辛く言えなかったためそのまま病院を抜け出してきた。
どうしても可笑しく思えた。
一体何が原因でこんな事になったのか…分かるはずもない。

博士の家に着いたときもう息切れ寸前だった。

荒い呼吸のまま俺は扉を勢いよく開ける。
「えっ！？こ…コナン君！？」
「どうして、コナンが！？」
「その話は後だ！」
俺は、そう荒々しく言って灰原のいる地下室へと一気に走り込んだ。
「工藤君！」
「何か、分かったか？」
「いいえ…。ただ、誰かに触れられた後があるの。指紋と一緒にね」
そう言いつつキーボードを打つ音だけは絶えない。
画面と真剣勝負でもしている感じだ。
「その指紋が誰かは分からないけどね。でも、大人ね。確実に」
「あぁこの大きさで子供とは言えない。しかも、子供でやるにしろ出来るわけがない」
「そうね…しかも解毒剤をどう動かしてこうなったのか、分からないわ」
「確かに、大人であろうと動かすことが出来ない…だとすれば其れを知っている関係者」
「えぇＡＰＴＸの事も、解毒剤のことも知っている関係者と言えば…『黒の組織』」
「あぁ。彼奴等じゃねぇと解毒剤の仕組みさえも分からないしな」
暫く画面と真っ向勝負をしていた灰原だが突如手を止めて口を開いた。
「…原因が全く分からないわ。昨期から、同じ事しか出てこない」

はぁと灰原は一つ溜息。
博士にでも聞いてみる？とナイスな提案。
俺も、すんなりＯＫを出して博士のいる元へと急いだ。

「博士！！」
「おぉなんじゃ新一」
「最近、博士の家に訪問しに来た人っているか？」
「うーん…儂が記憶しているのは新一君が組織に行こうと家を出て間もない頃じゃったかの…一人の女性が儂の家に来たんじゃよ『この家を見せてください』とな」
「その女の人の名前、覚えてる？」
「はて…何じゃったかの…ベルモットと言っていたような…」

俺はその言葉を遮るかのように有難うと言って、急いで灰原と地下室へ戻っていった。

「…シャロンが来ていただなんて…」
「きっとベルモットが灰原の地下室に入って薬をすり替えたんだろうな。…永久バージョンだと知っていないと無茶なことだな」
「私たちが組織に向かっている時間は一時間から二時間…今回は場所が場所だったから時間が長くなったんだと思うけれど。その間なら、すり替えることも可能ね」
「あぁ。でもよ……ベルモットはすり替えたところで何をしたかったんだ？」
「それもそうね…意味が分からないわ」

うんざりしたような表情で未だパソコンと向き合っている灰原。
そんな近くで同じようにうんざりしている俺。
意味が全く分からなかった。俺たちを元に戻させたくなかった…い

や、そんな単純なはずはない。
博士が夜中に起きていたことは知っていた。灰原を組織に連れて行こうとこの家へ来たのも博士は知っている。
だから、俺たちが出て間無しにこの家に誰かが来たって事は分かる筈だ。
ベルモットは俺たちを大きくさせたくないと思ったのか…それとも、ボスからの命令だとか。

「ホント分からないわ。指紋の人がシャロンって事は分かったわ…後の事がさっぱり」
「俺だって珍しく分からねぇ…。彼奴等の目的って抑も何なんだ？」
「さぁ…分からないわ」

はぁと二人で同時に溜息。
未だパソコンと格闘中の灰原を見つつ、俺は悩んだ。
彼奴等の目的は…灰原を消すこと…。ついでに俺も探しているはずだ。
…でも、わざわざ薬をすり替えらせたら、灰原を殺すことも俺を捜し出すことも難しくなってくるはずだ。
なのに何故だ…？

「本当に…シャロンなのかしら」
「博士が言うからそうだろうな…って待てよ。彼奴は確か、いたよな？あの場所に」
「えぇ。私たちが着く前からストーカーまでしていたのよ？シャロンにそんな余裕無いはず」
「だよな…。だったら一体誰が…」
「ちなみに解毒剤の完成時は一度試したわ。ちゃんと元に戻ったわよ。ま、その後はＡＰＴＸを飲んだけれど」
「危ねー実験したなお前」

「そうでもしないと確信出来ないじゃない。…なのに、どうして」
うーんと首をひたすら捻る俺と灰原。
ベルモットじゃないことは確定した。じゃあ、誰かが変装して…？
小学生が大人に変装することはやれば出来るけど相当難しい。

「…ねぇあの女の子…紅だったかしら。その紅って何時あの場所にいた？」
「紅か…彼奴は確か俺たちがその場で対決して二時間後ぐらいにようやく姿を現し…まさかっ！！！」
「紅が…？シャロンに変装した？待ってよ、あの子小学二年じゃない！」
「…元々大人だったとか」
「確かに、あり得るわね。私たちと同じような感じだったかもしれないわ」

聞いてみる必要がありそうだなと呟く。
でも、聞いて彼女が答えるかどうかは微妙なところだ。

「電話でいけるんじゃない？」
「ばっ…馬鹿！そんなことして良いと思ってるのかよ！」
「決して良いとは思ってないわ。でも、これ位しか手段はないでしょ」
「しゃーねぇか」
俺はそう言って電話を取り出す。
でも、生憎電池切れ。ふぅと一つ息を吐いて明日にすると言った。
「ま、そんなに急ぐことはないわよね。今は、原因究明が先だし…疲れたわ。ご飯でも食べましょ。お腹空いてきたわ」

「『腹が減ってりゃ戦は出来ぬ』だな」
「ま、そんな所ね。休憩を取ることも大切だしね」
そう言って、一旦俺たちは席を外した。
休憩をしている間はその事から一旦離れていた。
まともに頑張りすぎて、久々に疲れていた所為もあるかもしれない。
でも…休憩が終われば其れは一変。
張りつめた空気の中、キーボードを叩く音だけが響いていた。
幾度か溜息がこだまするぐらいだった。
「紅が触れた痕跡はありそうだけど…彼奴の本当の年齢が何歳かを知らなきゃならないかもよ」
「だな。大きくなって、こうしたんだとしたら実際年齢が大人程って事」
「そうね。だいたい私と同じ位かしら。２０代…位かしら」
「この大きさからすればそうだな」
解毒剤の周りに残されていた指紋から見ると明らかに大人。
紅は、俺たちの対決の場に随分後になって登場した。
その間に家に侵入することなど可能なはずだ。
名前を偽って入る事なんて、簡単すぎることだろう…組織の人間であるからには。
「きっと…紅が元々持っていた解毒剤で一旦元の姿に戻って、薬を改造した後アポトキシンを飲んで小さくなったんじゃないかしら」
「やるとしても其れ位だろうな…。あの一時間から二時間の間に出来ることは其れ位しかないだろう」
「予め薬を用意していたならば可能ね。……良く二回も耐えたわよね、アポトキシンと解毒剤と両方を呷ったんだから」

「だよな。余程慣れてなきゃ其れは無理だな」
「きっと、何度か戻ったことがあるんでしょうね…。…其れだけ辛い過去を見てきたんじゃないかしら」

だろうな、と俺も一言返す。
これで紅が変装してきたことは確定した。
後は…本人に確かめる他はない。

「また、確かめに行こうぜ」
「馬鹿じゃないの。組織に行ったら殺される確率９０％は超えるわよ？」
「良いんだ。紅と話がしたいだけだから」
「……分かったわ」

渋々といった感じだったが灰原に認めてもらった。
でも、灰原が許可をしなかったら俺は聞くことさえも出来なかったと思う。
聞けたとしても、予備の追跡眼鏡で絶対に現場に来るだろう。
認めてもらえば、もう大丈夫。ぶっちゃけ余裕と言ったところだ。

「…後。銃弾なんか受けるんじゃないわよ。組織のことだから、あり得るし。赤井秀一だってそうだったでしょ。キールの弾丸受けたんだから」
「わーってるよ。俺は銃弾を受けても死にやしねぇよ」
「ま、其れだけ自信満々なら大丈夫ね。其れで死んでみなさい、自分の恥よ」

意地悪そうに俺を見てくる灰原。ならねぇよと軽く返す。

「…誰か来る」

「誰だ？感じからして組織じゃねぇだろ」
「えぇ。きっとそこら辺の誰かだと…」
「あ、邪魔してもうたか？」
その色黒の肌を見た瞬間、わざとらしく俺と灰原はおっきく溜息。
「よぉ…服部ー。お前何で此処に来てんだよ」
「ホント。電話の一本ぐらいいれなさいよ」
殆ど呆れモードの俺たち。其れを平然と見ている其処の色黒男…もとい服部。
「まぁまぁエエやんけ。ちぃと工藤に客がおる言うてな」
「俺に？誰だ…？」
その瞬間、耳貸せと服部に言われ耳を上に向けた。
そして、服部の口から囁かれた言葉に俺は吃驚した。
確かに「紅」と言われた。
「なん…だと？」
心の動揺を抑えつつ、俺は地下室を後にし扉へとゆっくり近づいた。
「こんにちは、工藤君」
「お前、此処に来て俺を撃ち殺すつもりだろ」
「あら。そんなつもりはないの。もしも撃ったら…私が此処で自害してあげる」
「…そこまで言うなら…。で、話って何だ？」
「私の行き場所が無くなった」

俺は、何のことを言っているのか分からずはぁ？と聞き返してしまった。

「…ジン達に追い出された。もう消えろって…」
「嘘話じゃねぇんだな？」
「嘘だったら此処で自害してるわよ…」
「本当に嘘だったら自害とかするんだな？」

そう聞けば、するわよと如何にも鬱陶しさを抑えているかのような返事だった。
此奴の何かが変わっていたのは分かった。
心の中の何かが変わっていた。以前みたいな、憎しみの色は何処かに消え失せていたのだ。

「で…此処に暫くいさせてくれない！？」

俺はそう言われた途端、お茶を吹き出しそうになった。

「何か…悪い事しているのもどうかなって」
「そこまで言うなら別に良いさ。…俺からも質問だけど良い？」
「えぇ。構わないわ」
「…この家に一度来たか？」

そう言った途端、紅は黙り込んだ。
凄く言いにくそうなそんな表情をしていた。
だが、最後は諦めたかのように口を開いた。

「……来たわ。解毒剤が永久バージョンに成らないようにする為にね」
「何でそんなこと…俺たちの姿はばれてるんだぜ？」

「貴方達がばれやすくするのを防ぎたかった。…闇の中で生きてきただけだって言われた時そうだって感づいた。だから…せめて…貴方達の負担だけでも減らそうと思った」
「やったところで無駄って分かっているのに？」
「シェ…シェリー」
「ま、努力は認めるけれど。貴方の心の変化だけが異常すぎて吃驚したわ。でも、解毒剤を幾ら変えたって無駄なのよ。ばれてるんだもの…何もかも全て」
「紅。お前の本当の年齢はいくつなんだ」
「…二十ジャスト。成人よ」
「私と殆ど変わらないのね。組織にいたのかしら」
「えぇいたわ。顔は良く覚えてなかったけれどね…。ただ、シャロンから『シェリーという女がいる』とは聞かされてきたわ」
「私も、組織から逃げれたときは嬉しかったわ。外にはこんなに光の世界があるんだって…」
「うん。何か、今までの行為が馬鹿馬鹿しいわ…あ、解毒剤のこと本当に御免なさい！」
「なんだかしらねぇけど、反省してるみたいだし…。まぁ良いけど。じゃあ、俺から頼みがある」
「何？出来ることなら何でもする」
「…彼奴等の情報を解り次第とか教えてくれるか？」
「……了解。ばれないようにやってくるわ」

そこで話は一旦終わりを告げた。
紅がいれば正直情報を得やすいことは事実。

本格的な幕が…上がろうとしている。
光ＶＳ闇という複雑な名前の戦いが…今――。

第十四話　邪魔（前書き）

色々ごたごたになってます^^；

第十四話　邪魔

紅が来て数日たった昼下がり。
紅は、組織の情報を綿密に教えてくれた。

「本当にお疲れ様、紅」
「えぇ。幸いあの組織には監視カメラってものが一つしかないしね」
「金の問題ね。取り付けるのにも莫大な値段がかかるわ」
「一つ取り付けるので精一杯だし…そう言えば、工藤君は？」
「彼なら寝てるわ。昨日明け方まで色々調べてたから…」
「そう…。じゃあ、寝かせてあげましょう」
「そうね。彼、頑張り過ぎなのよ。限度ってものが見えない」
「ホント、やり過ぎも程々にした方が良いわよね。……で、服部君？何で私の後ろで盗み聞きしてるの」
「趣味が悪いわね。盗み聞きなんてどういう事かしら」

そうすると、例の服部君は出てきた。
何やばれとったんか、と言う台詞付きで。

「私たちを甘く見ないでよ。気配ぐらい、1キロメートル離れてても感じるわよ」
「あら、紅ってば凄いのね。私は其れの半分位かしら」
「へいへい。あんた等は気配感じるの上手すぎやねん」
「馬鹿言ってるんじゃないわよ。シェリーも私もとっくに気がついていたわよ」
「…んで、あんた等はこれから何するんや？」
「私達？そうね…私の後ろでこそこそ何かやってる工藤君と一緒に何か調べるしか手だてはないわ」
「知ってるなら先に言えよ、灰原」

「あら。一々言うの、面倒じゃない」
「…で、俺は何を調べろと？」
そうね…と私は頭に考えを巡らせる。
だが、一緒に調べるとさらっと言ったものの、ネタが見つからない。
……そう言えば彼、蘭さんの所…
「工藤君。蘭さんの所へ行ったの？」
「いいや。行ってない…むしろ、こんな姿じゃ行けねぇよ。彼奴が俺の小さい姿の正体が分かっていてもな」
「逢えなくて貴方は良いの？…会いたくて仕方がないなら行ってきなさいよ」
「別に……良い」
その瞬間、私は立ち上がって工藤君の頬を平手打ちした。
彼は、蘭さんの気持ちを分かっていない！！
「なっ…何するんだ灰原！」
「馬鹿！貴方に会えなくて、蘭さんがどれだけ辛い思いをしているか、分からないの！？小さくたって工藤君は工藤君よ！江戸川コナンじゃないのよ！姿を知られた今は、小さくても工藤新一として生活しているはずじゃないの！？貴方はまだ別人とするつもり！？」
言葉が止まらなかった。
蘭さんの気持ちを分かっていない工藤君を見ていたら、苛立ちを覚えていた。
病室で一人、工藤君が来るのを待っている蘭さんの姿が想像できた。
考えるだけで、涙が溢れそうになっていた。
「…謝ってきなさい、蘭さんに。勝手に逃げたこと…今まで犯して

きた過ちを全て謝ってきて！！」
「ちょー待ちぃ」
苛立った声で何？と目の前の色黒男に聞き返す。
「工藤かて、辛いんや。あの姉ちゃんに会えない工藤が一番辛いんやで？なのにアンタは強制しようっちゅう訳か」
「違うわ！工藤君よりも…遙に辛いのは…半年以上も待たされて、そしてこうしてまたまたされている蘭さんの方よ！貴方は蘭さんをどれだけ待たせたか、分かってないの！？」
工藤君の顔がはっとしたように見えた。
分かっていなかったのねと言葉を積み重ねる。
「半年以上も待たせて…良くもそんな口が叩けたものだわ。トロピカルランドで理由も告げず蘭さんから離れて…そのときに貴方が行かなければ平凡な生活が送れていたはずよ！？なのに…貴方と来たら…！！！」
「…分かった謝ってくるよ。蘭…に？」
最後に疑問符が付いたのは、工藤君の携帯が鳴り出したから。
「あら、蘭さんからのようね」
「ま、見た感じそうよね。その『げっ』って言う顔」
紅の後に続いて私も言う。
だって本当のこと。凄く顔が青ざめている。
今にも怒られそうだって顔が言ってる。
　工藤君は、一旦目を閉じると電源ボタンを押した。
つまり、通話を切ったのだ。

「な…何やってるの！？」
「どうして、そんなこと！！」
「……出る勇気がなかった。……蘭に怒られるのが怖かったからなのかもしれねぇけどな」
「…貴方という人は！！！」

今度は私が出た訳じゃなかった。工藤君の胸倉を掴んだのは赤紫色の髪をした…

「く…紅」
「シェリーの言っていたこともあるけれど、貴方は幼馴染みである蘭さんの気持ちを分かっていないっ！貴方の姿が戻るとき、貴方は何処かに行くとも何にも告げずに病室を出た。彼女は心底心配しているわ。……幼馴染みで思いを寄せている貴方にね！！」
「つまりは、工藤君。貴方は蘭さんに怒られるべきなのかもしれない。もしくは貴方から赴いて、謝って蘭さんを安堵させるか…この二つよ」
「工藤。この二人の言うてる事は合ってる。…どないするんや」
「――テメェ等は俺のことさえも分かっちゃいねぇ」
「分かっているから言っているのよ。そうでもなきゃ貴方の辛そうな顔を見逃しているわ。蘭さんに会いたい一心なら、もう一度電話を掛ける事ね」

彼は決心が付いたのか、携帯を取りだし電話番号を押し耳に当てる。

『…馬鹿』
「いきなりなんだよ、蘭」
『いきなりはどっちよ！！……勝手に逃げないでよ。……数時間逢えないだけで私がどれだけ辛いか分からないの！？ねぇ新一！！』

「でも、この姿じゃオメーには会えない。…悪ぃけ」
『良いよ。もう、病室に来ないで！！！』
其処までで電話は跡切れた。
彼は叱られたと言うべきなのか、それとも――嫌われたと言うべきなのか。
迷うところが違うような気もしたけれど、何故か悩んでいた。

「俺…蘭に逢いに行ってくる」
「えぇ。あんな事まで言われて行かない訳がないわよね…貴方のことだから。この世で失うことすら出来ないぐらい大切な存在の蘭さんにね」
「絶対、笑顔に戻してやる。彼奴の笑顔がなかったら――」
そこで工藤君は話を打ち切り、扉をゆっくり開けゆっくり閉めた。
残されたのは、私と紅、そして服部君の三人。

「よぉ彼処まで説得したなぁ」
「あれ位言わないと彼はあのままになってしまうわ」
「そう。…なんとか言わないといけないとは思っていた…だから」
あんな事言ったのよ、と私は扉に向かって笑う。
今頃猛ダッシュで街中を駆けていることだろう。
もしかしたら、博士の作ったスケボーを使うかもしれない。
…いや、使っている。彼はきっと使っている。
愛しの蘭さんに早く会うため。きっと使っている。
「行ってらっしゃい…工藤君」
そう呟いて私は、自分の地下室へと足を運ぶ。

もちろん、組織についての手がかりを…と行っても場所は既に確定。
後は、行くしかないような気がする。
……言ったところで、彼が乱入してくるのは言うまでもないけれど。

「シェリー、貴方行くつもりでいる訳？」
「えぇ、そのつもりよ。……まだ、消滅させてないから」
「ちょー待ちぃ。俺等が行ったところで、工藤が激怒すんのは間違いあれへんねんで？」
「覚悟の上よ」
「覚悟しているから、行くって行ってるのよ。シェリーはね」
「怪我すんのは、真っ平御免や」
「「なら、来なくても良いわ」」

紅と私の声が被る。
事実だ。彼が来たところで足手まといかもしれない。
彼は心から反対している。服部君も工藤君も。
私達が行くのを反対しているのは分かっている。
…けれど。今行かなければ、消滅しないのは確かだ。

「どうするの、シェリー」
「行くわ。工藤君の反対の声があっても」
「賛成よ。…服部君はどうするの」
「俺は反対や。アンタ等自分の身を考」
「「考えているからこんな行動が出来る」」

また、紅と私の声が被る。
ぶっちゃけ笑いたかったけど、笑う笑わないの話ではない。
真剣な話なのだ。

「……来たくないのなら構わない。お前は来なくても私達は行く」

突如紅の口から吐かれた言葉に私は驚愕した。
「服部君」と呼ばず「お前」と言っていた。
これが、本来の紅なのだろうか…。

「…そんな訳よ。どうする？服部君」
「……行かへん」
「そう…ま、予想通りだけどね。シェリー、行こう」
「分かったわ。じゃあ、工藤君には買い物っていう風に伝えておいてくれるかしら。彼、組織のことになると絶対に来るはずだから」
「…悪いけど、其れだけはお断りや」
「……好きになさい」

私の言葉を最後に、紅と私は同時に走り出し家を飛び出す。
向かうは、当然組織の場所。前に場所は確定していたから道順も覚えている。
走っている間、私と紅は一言も会話を交わさなかった。

だが、有る声で一度止まる羽目になってしまう。

「紅、灰原。何処に行く」
「…工藤君」
「蘭さんの見舞いは？終わったわけ？」
「あぁ終わった。だけど、お前等がどうせここに来ると思って待ちかまえてた。……服部から聞いたしな」
「へーそう。でも、貴方に付いてきてもらうわけにはいかない。…貴方がいても正直邪魔よ」
「邪魔だから何だ。俺は決して組織に近づくなと入っていない。だけど、お前等が行けばまた大けがすることは間違いない」
「だから何よ。私達の勝負なのよ？貴方が入れば邪魔者と同じなわ

け…分かる？工藤君」
「あぁ分かるさ。でも、お前等を危険に晒したくない」
「貴方が危険に晒される。…だから、来ないで」
その紅の言葉を最後に私は、工藤君に体当たりし突き飛ばす。
そして、また紅と共に走り出す。
本当はこんな事をするつもりはなかった。
ただ、此処は組織関係者との勝負。…探偵が混じっても無意味だ。
また死ぬなと言って庇いに来るだろうから。

「…これで大丈夫ね、シェリー」
「えぇ。追ってこないし」
「此処は私達の勝負。工藤君に来られても迷惑と言ったらありゃしない」
「そうね。彼には悪いけれど……先回りとかしそうだわ」
「ホント。シェリーのこと必死になって庇うぐらいだしね……貴方、蘭さんに大して妬いたりしてないわよね」
「そんな事はないわ。彼には蘭さんしかいないもの…好きだと告白したぐらいだしね」
「そうなの。…あの二人元々良い感じだしね」

そう言ってくれないは淡く笑う。
その顔は何処か寂しさが混じっているようにも見えた。

「私…元々彼氏とかいたの…でも、組織によって殺された」
「え？奴らに？」
「そうよ…！偶然歩いていたところで組織は発砲し、彼は病院に運ばれたけれど…運ばれたことにはもう、手遅れだったそうよ」
「…でも、何で組織に？」
「体を自ら縮めて、組織へ出向いたのよ。そうしたら、私はばれな

かった。紅って本当の名前を名乗ったけれど、大きいときとにてないからって言う理由ではいることが出来たのよ。…そして、扱き使われたわ」
「で、今に至る訳ね。組織に追い出されて、自ら私達の元に来たって事ね」
「えぇ。…組織達に復讐をしなければいけない。彼のことも…自分のことも含めてね。シェリー拳銃は持ってる？」
「勿論。工藤君にばれないようにちゃんと持ってきているわ…ま、彼は後ろの方でストーカーしているみたいだけれど」
「ホント。来ないでって言ったのに、懲りないのね……工藤君。出てきたらどうなの？もしもこのままストーカーを続けるのなら発砲して無理矢理にでも返すわ」

私達は、工藤君の方を振り返ることなく会話を続ける。
私の体当たりの力はそんなに強くはなかっただろうし、立ち直るのも普通よね。
工藤君のことだから、何処かで鍛えてきたんでしょうけど。

「…追ってきて悪いか」
「悪いわ。言ったでしょ、組織の関係者じゃない貴方は邪魔なのよ」
「だけど、お前等の身を俺は考えている」
「その考えは捨てなさい。…今は必要ではない筈よ」

紅と工藤君の言い合いの中、私はそっと拳銃を構える。
こんな事、したくはない。
でも、今は組織の関係者ではない工藤君は必要じゃない。
急所は狙わない、精々狙うとしても足か腕。
足の方が適切かもしれないけれど。

「…工藤君。いい加減にしないと、シェリーが足辺り撃つわよ」

「構わないさ。…それでもお前等の所に行ってやる」
「帰りなさいと言っているでしょう！！！貴方は必要ではない！！」
紅の声は徐々に荒くなっていく一方だ。
顔は、冷静さを保っているが言葉だけはどんどん荒くなっていく。
それでも工藤君は冷静だった。苛立つぐらいに冷静だった。
「お前等の人に頼りたくない気持ちは分かった。…だけど、お前等が怪我をすれば、みんなが心配するだろ」
「…もう良い。勝手にしなさい。…行くわよ、シェリー」
「分かったわ…」
そう言って、私は紅のとなりを歩く。工藤君が付いてくる様子はなかった。
だが、付いてこない理由は工藤君の行動にあった。
突然紅が、目を閉じ倒れていったのだ。
吃驚して後ろを振り返ってみれば、時計型麻酔銃を持った工藤君が立っている。
「く…工藤君！」
「わりぃな、紅。こうでもしないと、喧しいんだ」
「や…喧しいって…そんな事して…良いの？」
「これ位しか方法はねぇんだ…もしも紅が組織の奴の所に行ってみろ。きっと、灰原より酷い仕打ちを受けるはずだ」
「でも…裏切った私の方が仕打ちは酷いんじゃなくて？紅は、組織の奴らによって追い出されたんでしょ？」
「お前は俺が守る。そう決めてるからマシなんだ。…だけど、紅の場合何時謀反を起こすか分からない…守ることは出来ない」
確かに、幾ら何かしたら自害すると入っていても、本当にそうする

とは限らない。
しかも思いっきり嘘をついているだけなのかもしれない。
信用は出来ないのかもしれない。
…御免なさい、紅と最後に呟き工藤君と共に組織の場所へと向かう。

「紅は…来るのかしら」
「恐らく目覚めたら来るだろ。彼奴のことだからな」
「…貴方には申し訳ないこともしたし、言ってしまったわ…御免なさい」
「バーロ。謝らなくたって良い。お前もやり辛そうにしていたのは分かっていたから」
「流石探偵さん。お見通しな訳ね」
「そんな所だな。…急ぐぞ」

えぇと一言返し、走り出す。
紅には本当に悪いと思っているわ。
でも、今は工藤君と一緒に調査をさせてもらうわね。

くれぐれも私が裏切ったって事は言わないでほしいの、紅。

だから――

第十五話　信じられない

「工藤君」
「何だ？」
「…紅が来てる」
「わーってる。…行くぞ」
「えっ？ちょ…」
「待ちなさいよ！工藤君！！」

紅の声は、鋭かった。
何かが凍り付いてしまうほどに冷淡たる声で、そして鋭かった。

「どういうつもり？シェリーだけを連れて行って」
「別に。お前は俺が守ってやる対象に入っていないだけだ」
「へーえ。蘭さんとシェリーがいて私はいないと」
「あぁ。少なくともお前は謀反を起こす可能性が高い」
「まだ、信じないのね」
「信じろと言う方が…紅、危ない！！！」
「えっ…？」

後ろから、組織の奴らが来ているのに紅は気がついたが、紅が振り向いたと同時に紅の頭をジンに殴られその場に突っ伏せる。
私は目を見開いた。何故此処にいるのかと言うことに驚きを隠せなかった。

「紅は貰っていく」
「また…扱き使うのね。ジン」
「ふん。此奴が勝手に逃げ出しただけだ」

逃げ出した？と私は聞き返す。それじゃ矛盾もくそもない。
紅は追い出されたと確かに言っていた。
なのに、今ジンの口から吐かれた言葉は勝手に逃げ出したと言う言葉だった。

「紅は、逃げ出しただけなのか」
「あぁそうだ。此奴は何の許可も無しに逃げ出した。…我らの目を盗んでな」
「でも、紅がいたところで私達の調査が進むわけではないわ。それに、良い具合に貴方達が来てくれたしね。…いっそのこと、此処でケリを付けても良いのよ」
「…灰原。お前、また」
「私もケリを付けたいしね」

工藤君の言葉を無視し、私は話を進めた。

「怪我なんてしたって良い。貴方達を消滅させたいのよ」
「ふん。その台詞が何時まで続くか…良いだろう」
「行くつもりなのか、灰原」
「このまま引き下がると思う？私は行くわ。何が起ころうと、ジン達を消滅させる」
「…分かった」
「来るのなら好きにするが良い」

そう言ってジンは私達に背を向けすたすたと歩き出す。（勿論、気絶させた紅を持ったまま）
何かされるんじゃないかと心配しつつも、私達は付いていく。
付いていってケリを付けられるのなら…復讐が出来るのなら本望だ。
お姉ちゃんの分を全て晴らしたい。

「…灰原。お前、危険だって事分かってて」
「当たり前じゃない。そうでもしないと行かないわよ」
そうかと工藤君は一つ言って黙る。私自身も暫く言葉を発さなかった。
余計なことを喋ってしまいそうだったのも一理ある。

…そして。
ジン達の足が止まると共に私達も歩を進めるのを止める。
其処は紛れもなく数日前、死闘を繰り広げた場所だった。
工藤君や私は死ぬ寸前まで言って、そこで彼は蘭さんに全てを明かした――そんな場所に再び来た。

「…シェリー。此処で貴様は我らと対決すると言ったな」
「えぇ言ったけど？それがどうかして」
「前のは手ぬるだったのやもしれない。…本気で行くぞ」
「どうぞ、ご勝手に」

そう言って流したが、内心前より本当にやばくなるんじゃないかと思っていた。
…また、工藤君が庇い出す。
死ぬなと言ってまた、私を庇いに来る…きっと。
嫌と言ったところで彼に通じるはずはない。其れは全回闘ったところで分かり切っている。

「…で、灰原。お前服部にストーカーされてるのにやるってか」
「ストーカーなんて知らないわ。服部君が其れだけ悪趣味になっただけよ」
「後でお前こっぴどく叱られるぞ？」

「私が叱るべきだと想うけど」
「幾ら年上だからってな…」
「…何？何か文句でもあるの？」
「いっいや。無い。…でも、服部ってあれだけ反対してたんだろ？なのにどうしてここに来てるわけだ」
「…どこぞの名探偵さんが変な事しないように監視でもしてるんでしょ」
「何だよ其れ嫌味か」
「よく分かったわね。でもその分向こうの探偵さんも力、入れるんでしょうね」
「その通りや」

そう言って、観念したかのように出てきた色黒男―もとい、服部平次。

「工藤は何するかわかれへんしな」
「テメェも嫌味言いに来たのかよ」
「あほぉ。そんなこと言うために来たんやったら、わざわざストーカーしてきた意味あれへんやん」
「…やっぱそういう事だったのね。東の名探偵さんの監視…ね」
「其れもあるけど、あんたの監視もあるわ。この前は良くも病院から勝手に抜けてやなぁ」
「あぁもう良いわ。愚痴を聞いてるのも疲れた」
「アンタ最低やな」

そう言って呆れ顔を見せる服部君と、結構軽く流した私。
そして怒りが爆発寸前の工藤君。（嫌味だかなんだか知らないけれど）

で、と服部君は話を仕切り直す。

「此奴等とまた対決するって言うやん。あんた等また死ぬ寸前に「別に構わないわ」
「私がどうなろうと自分の勝手。心配されるなんてありがた迷惑に近いわ」
「ありがた迷惑かよ…俺は復讐したい気持ちも分かるけど、おめぇが心配なんだよ」
「何其れ、愛情表現？」
「テメェ、人が真剣に話しているときに…」
「あら、御免なさい。…心配してくれるのは好きにしてくれて良いのよ。でも、気持ちだけは心配されたところで何も変わらない」

所謂決心は揺らがないって言う言葉と等しい。

話している内に、奴らは姿を消していく。
でも、ジンだけはその場に残って私達に言葉を残した。

「勝負は我らが全員配置に着いてからだ」

今度は配置付き。…手強くなりそう。
この前はバラバラだったしね、と言い返す。
さっきみえ
「ふん。……殺されると言うことが分かっているのに其処でもたもたしていると、後でお前等全員泣く羽目になる」

その場にいる全員が（ジンを除く）その言葉の意味を理解できないでいた。
全員泣く羽目…に？

ジンが姿を消した後、私達は個別で行動すると誓い合う。
そして、更に『どんな姿でも絶対生きて帰って来る』という固い約束を交わした。
三人は背を向け、何も言わずそれぞれの方向に動き出した。

何処まで続くのか分からない道を必死に走っていた。
ふと、息が苦しくなって立ち止まり呼吸を整える。
（一寸本気で走りすぎたかしら――）
そんな事を想いながら、膝に手をつく、荒い呼吸を整えようとする。

――だが。
ふと私が窓の方に視線を寄せたとき、上から何かが振ったような気がした。
銃弾如きじゃない。大きなもの。…人のような気がした。

急いで窓辺に賭より、窓を開ける。
下で倒れている人物は、出血をしていない。
だけど、その人物は何度も見たことがある人だった。

「う…嘘……」

第十六話　火炎

俺は、出口が何処か分からない道を必死に走っていた。
だが走りすぎたせいか、可成り息も乱れている。
その息を整えようとして、はぁはぁと深呼吸みたいな事をする。
だが、次にまた走りだそうとした所で、探偵バッチが工藤君と呼んでいた。

「灰原？」
『大変よ！！窓開けて、下見てみなさい！！』
「あ、あぁ」

言われたとおり、目の前にあった窓を開け下を見てみる。

「う……嘘だろ…」
『嘘じゃないわ。彼女きっと此処に連れてこられてたんだわ！！』
「そんな…どうして」
『分からないわ。…とにかく一旦外へ出ましょう』
「いや…服部に何とかして貰う」

そう言って探偵バッチを口元から外し、ポケットにしまう。

もう一度窓の下を見る。
其処には倒れている一人の女の姿。
守ってやりたいと何度も何度も思った俺の幼馴染み。
――信じられなかった。何故此処までされるのかと。

俺は、足を来た方向へと向きを変え階段を駆け下りた。
蘭を助けたい、そう思った。
（死なせはしねぇよ、蘭！！！）
そう思いながら、必死に階段を駆け下りていた。

外は冷たい風が吹き付けてきて思わず身震いをする。
そして、目の前で倒れている蘭の肩を揺すって起こさせた。

「蘭！！しっかりしろ蘭！！！」
「……し、んいち」
「蘭！？」
「……何が…あった、の」
「お前、何も覚えてないのか？」
「突き落とされたのは…記憶してるけど、その前に何されたか…全く記憶にない」

彼方此方に傷があった蘭の体。顔の所には一つ痣まである。

「悪かった。…もっと早く気がつくんだった」
「良いの。私の知らない間に連れて行かれたから。…新一の所為なんかじゃない」
「いや…。其れと病院では…御免」
「新一を怒らせた私に責任があるの。…電話でも勝手に怒って、それに病院で更に怒って…新一に辛い思いを…え？」

俺の体が勝手に動いたのか知らないけど、目の前でゆっくり起きあがった女をいつの間にか抱きしめていた。
新一？と蘭は戸惑ったような声を出す。

「お前に辛い思いをさせたのは俺なんだっ！お前には笑顔を見せて

やらなきゃならないのに…俺と来たら俺と来たらっ」
「大丈夫だよ、新一。…新一は、何時だって私に元気、くれたじゃない。どんな時も、ずっと私に元気くれたよ？」
「…お前は俺が守ってやらなきゃならないのに…逆に守られっぱなしだ。今この姿であっても、工藤新一の姿であっても」
「守るべきものはずっと同じなのに、守れない……でしょ？」
「コナンであっても新一であっても、お前だけは絶対に――」
「ううん。私だって新一、守ってあげたいよ……守ってあげたいけど…私はこんなにも無力で、新一を守るには足りない。…どうしようもないの。守られっぱなしじゃない…」

俺は、抱きしめる力を強め、そんな事ねぇよと言う。

「俺は、お前に慰められてきたんだ。…俺に力をくれたのは蘭、お前なんだ。…だから、お前は無力って訳じゃない。…別の意味で力もあるけど、お前はずっと俺を慰めてきてくれたんだ。自分を信じろよ、蘭」
「…分かった。…其れより新一、何で此処に」
「あ…」

蘭の体をゆっくり離した後、今までの事を全て話した。
蘭は時々顔色を変えたりしていたけれど、最後には納得した。

「と言うことは今、哀ちゃんと服部君が何処かにいるって事よね？」
「あぁ、そう言うことになる。…どうする？お前も来るか？」
「…行く。新一を一人になんてしてられない」

そう言って、よろよろと立ち上がる蘭。
小さいままの俺は、支えてあげることすら出来ない。
其れが悔しくてならなかった。

組織の所に入った後、時折頭が痛いと言っていた蘭。
でも、最後辺りに来ればその声は消えていた。
だが、とある部屋の前に付いたとき背後に気配を感じた。
その気配に気がついたと同時にガシャと言う音も聞こえてくる。

「最初のお出ましは工藤新一と毛利蘭か」
「じ…ジン！！」
「また死にに来たようだな。ふん、しつこい奴目。毛利蘭は上から突き落としたのに生きていたとはな」
「やっぱり貴方だったのね、私を病院で眠らせこの場所へ連れてきて、上から突き落としたのは」
「あぁそうだ…。消したいのもあったがな。…真の目的は敢えて言わない」
「新一を一人残して、後は消したかったとかそう言うのじゃないでしょうね」
「ふん。勝手に想像してろ」

そう言って、ゆっくり俺たちの方向へと近づいてくる。
ジンが一歩近づけば、俺たちは二・三歩後ろへ下がる。
最後は壁まで追いつめられ、行き場を失う。

銃が発射されるような音が聞こえ、思わず目を閉じる。
その銃声は、俺たちに向いた物ではなかった。
もう少し後ろの方で、背が低い女が二人銃を構えていた。
二人の銃口は売った後なのか白い煙が出ていた。
そして、目の前で引き金を引こうとしたジンの顔が僅かに歪んでいた。

「殺されるのは、ジンじゃないのかしら」
「工藤君達を殺したら、承知しないわよ…ジン」

「シェリーに紅…か。紅がどうやって目を覚ましたか敢えて聞かないでおこう」
「聞かなくたって答えるわよ。…狸寝入りよ。狸寝入り」
「所謂誤魔化しか」
「誤魔化しって言うよりは…寝たふりってやつね。気がつかないジンも鈍感よね」

俺はそんな会話を聞いている最中、凄く安心していた。
紅はちゃんと生きていた。組織の生活を離れ、生きてきたんだと。

「良く此処が分かったな」
「えぇ貴方の声が聞こえたからね。此処、良く響くし」
「だから、ジンの居場所も分かりやすい訳よ」

余裕の表情で言う灰原と紅。

「だが…その余裕の表情は何時まで続くか」
「「なんですって…？」」

二人の声がそろう。
その時には俺たちも驚きを隠せないでいた。

「……あぁそう言う事ね。わざわざベルモットを入れた訳ね」
「元からここに来るのを想定した……ジンがやりたいことは、俺等を自然的にこっちへ招かせ此処で射殺するつもり…そうじゃねぇのか？ジン」
「その通り。さすがは探偵なだけあるな」
「良いけどさっさとベルモット、出せよ。何時までも隠れてたって終わりは来ない」

「其奴やけど、とっくに俺が気絶させたわ」
聞き覚えのある関西弁が右から聞こえた。
「服部…お前、ベルモットと合ったのか？」
「あぁベルモットって言うんか。其奴なら鉢合わせになったわ。ま、日本刀持ってきてただけあって結構簡単に片付いたけどな」
「でも、其れだけじゃ片付かないはずよ！？」
「あぁそうやった。銃もっとる奴が偶然其処通りよってな、其奴の力多少借りたわ。なんや知らんけど、男で帽子かぶっとって紙が短うて、偉い無口なやっちゃでな。あぁでも一回喋ったとき、偉い低めの声やったし…俺より背ぇ高うて名前も教えてくれへんかったわ」
（男で帽子を被る…？髪が短い…無口…低めの声…背が高い…まさか！？）

その時、灰原が工藤君と言って俺を呼ぶ。

「それ…赤井秀一じゃ…」
「だと思うけどな。ＦＢＩの赤井秀一…って待てよ！？赤井秀一は確かキールに殺されたんじゃ…」
「それもそうよね…。って事は」
「紛れもなく変装よね」
「おい。何勝手にこそこそ話をしている」
「ジンは知らなくて良い事よ」

赤井秀一は、キールに呼び出され裏切りの銃弾を受けたはずだ。
なのに、其奴がいるとなると紛れもなく誰かが変装している。
…誰なんだ？
俺は頭を中で色々該当しそうな相手を思い浮かべた。
だが、該当するのは…

（母さん？）
いや…違う。
母さんはそんな事をするような人じゃない。
…父さんなら…しそうだな。
でも、していたにしろどうして此処まで来たんだ？
俺等の監視…かもな。

「新一？どうか…したの？凄く考え込んでたよ？」
「いや…なんでもねぇ」

まさか…父さんや母さんが？
いや、あり得ない。
俺自身は確かに前灰原に変装したことはあるけど、あれを作成したのは母さんで…。
服部が工藤新一に変装するときも用意してくれたのは、母さん。
ＦＢＩの関係者が変装したって事は…まず、無いと思いたい。
ジョディ先生でもあるまいし。

「そう言えば紅、昨期腰辺り怪我したって言うけど…大丈夫なの？その状態で戦えるわけ？」
「あ、あぁそれ？昨期ショットガンで少し撃たれて…更に気絶までしてしまったわ」
「あらら。とんだ災難ね」

ショットガン…！？気絶！？
赤井秀一もショットガンを持っていたはず！！
それに服部は気絶させたって言ってた。
…まさか…まさか…まさか…。
（また紅か！？）

もしも紅がベルモットに変装していたなら…ベルモットはまだこの辺にいるはず。
昨期から変な気配がすると思ったけど、やっぱりベルモットなのか？！
いや、待てよ…。
ウォッカが来ている可能性もある。
キャンティだとか色々可能性はある。
でも、昨期から灰原の肩が僅かに震えてる。
…やっぱりベルモットだ。

「シャロンはきっと何処かにいるわ」
「どこから来るかは知らないけれどね」

きっと…この近くにいるはずだ。
四方八方から変な気配がするのはこの所為か…。

だが、やっぱり俺の背後ぐらいが一番強い。

まとめてみると、紅はベルモットから頼みでもうけたんだろう。
『一寸時間稼ぎに変装してくれ』とでも言ったのかは知らねぇが。
そして、ジンを探していた服部と変装してきた紅とが鉢合わせし闘う羽目になる。
更に変装している赤井秀一が来て、ショットガンの銃弾を紅は食らった。
何度かその攻撃は続いたと考えても良いのかもしれない。
そして、最後に一発撃たれた後気絶した…。
灰原に会うときはもう気絶から立ち直って普通に行動していたときに会った事になる。
この場に来て、てっきり気づかれていないと思って紅はその場で口を滑らせたわけだ。

「何処から来るかなんて分かるぜ。その前に先ず、ベルモットは…気絶さえもしてないんだから」
「どういう事！？」
「そりゃそうさ…。赤井秀一はキールによって既に殺されている。赤井秀一に誰が変装したのかは知らない。…じゃあベルモットはどうだったか」
「そりゃ、ショットガン受けて気絶したんでしょ？昨期から私言ってるじゃない」
「…ベルモットも変装していた」
「ふん、何処の何奴がそんな小賢しい真似を」
「『ショットガン受けて、気絶した』ってまんまと口を滑らせた奴が一人いるよな」

そう言った後、一斉に紅の方へと視線が向く。

「そう。お前だろ？紅。また、解毒剤でも持ち歩いてたみてぇだな」
「だったらなんだって言うわけ？一々解毒剤やＡＰＴＸ４８６９を使うなんて面倒よ？」
「ベルモットに頼まれたんだろ？『一寸時間稼ぎに変装してくれ』とでも言われたんじゃないのか？」
「言われてないわ」
「なら、聞くけどどうして灰原の前で『ショットガンで少し撃たれて…更に気絶までしてしまった』って言ったよな？なんで赤井秀一の所持品のショットガンと服部の言う気絶が被っているのか」
「あら、赤井秀一には会っていないわ」
「だったら可笑しくねぇか？俺等が知っている中でショットガンを持っているのは赤井秀一。そして服部は其奴を気絶させたって言ってたよな？赤井秀一に会っていないというお前だけど、服部には会ったことになるよな？つまりは」

「服部君の言う、鉢合わせになったって言うのは紅と鉢合わせになったって事ね。…きっとまた解毒剤飲んで元の年齢に戻り変装して鉢合わせになったんでしょうけど？」
「知らないわ」
「誤魔化したって無駄だぜ。ベルモットは外傷一つ負ってやしない。…俺の背後にベルモットは控えている。何時俺等を殺そうか、ってな。試しに出てきて貰おうか？ベルモットさんよ」

そう言うと同時に、靴の音が聞こえ俺の背後からベルモットは出てくる。
参りましたとでも言いたそうな顔だった。

「えぇそうよ。確かに私は紅に頼んだわ『私に変装して、時間潰ししてきてくれない？』ってね」
「…その後紅に解毒剤とＡＰＴＸ４８６９を渡して去っていったんだろ？」
「その通りよ。…私はジンに頼まれた配置に付かなきゃならないから、誰かと鉢合わせになると時間が無くなるのよ。だから、偶々会った紅に頼んだ訳よ」
「話は良い。此奴等をどうばらすかだ。…なんだって良いぞ？」

しまった、と俺は心の中で呟いた。
推理に夢中になっていて、今の状態をすっかり忘れていた。
くそっと俺は一言呟く。

考えを巡らせている内に、一つ銃声が聞こえ鈍い音を立てて俺の腕へと当たる。

「く…そっ」
「しっ新一！！！」

「「工藤君！！！」」
「安心しろ、これ位で死にやしない」
痛いと言えば蘭に心配かけてしまうからとは敢えて言わなかったが、事実蘭に心配をかけたくはなかった。
小さいままの俺は大きい状態とは違いまともに蘭を守ることすら出来ない。
服部に頼むしか手段はない。
灰原の場合は守ることが可能だ。
…だが、紅の場合は二年の癖に百三十センチメートルも有る為身長が足りない。
彼奴の場合は自分のみを守ることも容易いだろうから安心だ。
服部も自分の身を案じることだって出来るはずだ。

「服部、蘭を頼む。俺のこの体じゃ、蘭を守ってやることは出来ねぇ」
「…了解」
「でも、貴方このままじゃ、またあの時みたいに！！」
「そうかもしれねぇ…。けど、けどよ…決着、付けたくないのか？」
「！？…そうよ…確かに決着は付けたいわ。…でも工藤君が傷つくのは…」
「仕方がねぇんだ。せめてお前等を無事に返してやりたいからよ」
「貴方の身も考えてよ！！！そんな事になって、蘭さんを苦しめるだけじゃない！！！」
「！！……だけど、追いつめられたら終わりだ。俺は為す術もなくなれば…死ぬしかないんだ」
「止めて新一！！！」
「らっ蘭？」
もう止めてよと小さいままの俺の肩に手を置く。

目は潤んだ状態だった。

「新一が死んでしまうなんて…やだよ！！！絶対嫌だ！！！」
「だけど…」
「新一が死ぬならいっそ私が死にたいぐらいだよ！！！」
「馬鹿野郎っ！！！」
「し…新一？」
「お前を一人死なせるなんて出来ねぇよ！！！どんな卑怯な手を使われようが、蘭だけは絶対に死なさない！そう決めたんだ」
「……やっぱり、新一には勝てない」
「え？」
「死ぬなら……二人で良いじゃない？前にも死ぬときは一緒だっていってくれたじゃない」
「そうだな。……だけど、今この場でジンは挟み撃ち。だけど其れと同時に俺等も挟み撃ちをされてるんだ」
「どういう事よ、それ」
「灰原、気がついているはずだろ。お前の後ろにウォッカが控えている」
「なっ！？」

珍しく気がつかなかったらしい。
…此で俺達は完璧に挟み撃ちとなってしまう。
位置関係で行くと

ウォッカ　灰原&紅　ジン　俺&蘭&服部　ベルモット

ジンが拳銃を二つ持っているとすれば俺達は完璧に為す術が無くなってしまう。
…此こそ、死ぬしかないのかと。

「ふん。挟み撃ちしたところで、終わりだな。……もう一つ、有るからな」
「くそ……っ」
「悔しんだって無駄だ。…もう死ぬしか選択肢はないのだからな」
「どないすれば、ええんや…」
「くそ…っ。挟み込みされて俺達は動くことさえ出来ねぇ」
「此処には警察だって来ないしね。シェリーや紅を此処で殺るなんて簡単な事よ」
「なら、終わりにしようか」
「……その前に、警察に出頭してきたら？」
「何？」
「ジンって耳、悪かったかしらね？良く聞いてみなさいよ。サイレンの音が鳴っているわよ」

その言葉を合図に全員が黙り込む。
本当に小さい音だが、警察が来ている。
サイレンの音が、外でなっているのが分かった。

「誰が呼んだのかは知らないけれど、貴方達に手を打つことは出来ないわ」
「……ちっ」

そう言って、爆弾を五個下にばらまいて去っていくジン。

「また建物を爆破させるつもりよ！！！急いで！！」
「急ご！！」

そう言って一斉に走り出した俺達。
だが、俺が走り出したと同時に爆弾の一つが激しい音を立てて爆発する。

俺は、その場で足を取られ動けなくなる。
……その数秒後。
動けないままの俺を、もう一つの爆弾が襲う。
火炎に巻き込まれ、俺は意識を失っていった。

「新一ーーーーーっ！！！」
「工藤ーーーーー！！！」
「工藤君ーー！！！！！」

そんな叫び声が聞こえたけれど、俺の耳に届くことはなかった。

第十七話　蘭の死

信じられなかった。
突然、爆発音が聞こえてその場でドサッという音が聞こえて。
後ろでは新一が座り込んでいた。
足を取られたのかもしれない。
助けに行こうと思って、動き出した瞬間――
爆発音が聞こえ、新一は火炎の中に飲み込まれていった。

「新一ーーーーーっ！！！」
「工藤ーーーーー！！！！」
「工藤君ーー！！！！！」

私の後に服部君・哀ちゃんと叫び声が連なった。

「嘘よ…工藤君っ」

まさか…死んだ？
そんな事無い！！！絶対生きて帰ってくる！
哀ちゃんと服部君の肩が僅かに震えてる。
…まさか…本当に…？

「新一ーー！！！」
「落ち着いて蘭さん！！彼はもう、いないのよ！！！」

紅ちゃんに支えてもらっても、信じ切れなかった。
新一が……死んじゃったの？
ねぇ…嘘だって言ってよ…。

火炎は、私達の前で燃え盛るばかり。
呻き声一つ聞こえてこないことに少しだけ不気味感を覚えた。
でも、火炎の中から誰かが出てくる様子もない。

「嘘って言ってよ……新一」

喋りかけたところで、返答はない。
新一は帰ってくるって、信じてるよ…。

「ねぇ新一っ！！何時も『待ってろ』って言ってたでしょ！？帰ってきなさいよ！！！馬鹿ッ！！！！！」

突如溢れた涙。私は止めようともしなかった。
帰ってこないんじゃないかと思うと、怖かった。

お願いだから…帰ってきて。
また、蘭って私を呼んで、笑ってよ！！！

新一……。

私はその場で崩れ落ちる。呆然としている自分がいた。
悲しみも辛さも全て呆然へと変わってしまった。
辛かった。
この世で一番大切にしてきた人物を、今この瞬間失ったような気がした。

帰ってきて…お願いだから…新…一

「蘭さん。…一度、戻りましょう。消火活動を終えてから、話を聞

きましょ？そうすれば…何か、分かるはずよ…」
「俺もこの場離れるんは辛いけどしゃーないんや。工藤が生きてると信じておけばええねや。其れで帰ってこうへんかったら…」
「言わないで！！！！これ以上何も言わないで！！！！」

無意識にそんな事を叫んでいた。
新一は生きている。ちゃんと生きている。
信じていて……良いでしょ？

「…ねぇ服部君・哀ちゃん・紅ちゃん」
「なんや？（どうしたの？）」
「私を……此処に残して」
「駄目よ！そうしたら、貴方ま…」

哀ちゃんが言い切ろうとしたその時、私の上から火炎が襲ってくる。
その場で私は逃げ切れなかった。
辺りを見渡す。だが、其処で何かが起こるわけでもないと思っていた。

…だけど

これは　奇跡――？

「ら……ん」
「うっ嘘……新一？」
「しっかり……しろっ。今、助けて……やっから」

確かに聞こえた。
姿が全然見えないけれど、新一の声。

私が何度も生きていると、信じていた新一。
徐々に形が見えてきて、最後にはちゃんとした新一が見えた。

「蘭っ」
「よかった……新一…生きてる」
「あったりめぇだ。お前の前で死ねるかよ」
「でっでも出血多いんじゃ…」
「お前のためなら何だってしてやるさ。…小さいままじゃ行動も制限されるけど」
「そうだよね…でも、何処から抜けるの？出口が」
「あっちだ！来れるか？」
「う…うん」

ゆっくりと立ち上がり、窓の方へと急ぐ。
走っている間の小さい新一は、新一と被るぐらいそっくりだった。
泣きそうなぐらい、嬉しくて。
大切な人を取り戻せたんだと。

――有り難うございます、神様。お陰で、私も新一も生きています。

「蘭、一寸体貸せ」
「へっ？」
「良いから」
「う、うん」

そう言って新一の元に駆け寄る。
その瞬間、凄い力で私は新一に抱えられ下へと落下していく。
小さいのにこんな力が出せることに私は吃驚した。
…でも、このまま落ちれば地上に落下して死んじゃうんじゃないの？

「ちょっと…これじゃ、死んじゃうじゃない！」
「よく見てみろ。警察が待機してくれてるからよ。……それに、ありがとうな蘭」
「へ？」
「蘭、ずっと俺が生きてるって信じてたんだろ？…なんか蘭の声が聞こえた気がして、目が覚めたんだ。『死なないで』ってな」

ずっと、燃え栄える火炎の中で彷徨ってた。
起きあがった当時は、動くことも出来ずに混乱の連続。
それでも私をずっと捜していたって新一は言う。

「蘭を守ることが俺に託された使命なんだ。…小さくても大きくても守るべき物は蘭、お前だ」
「う……うん」
「もうすぐ、下に付くから、衝撃とかで気絶すんなよ」
「分かってる」

下では、見覚えのある刑事さんが沢山いた。
目暮警部もちゃんと、いた。
そして、ふんわりとした何かに私達は落ちていく。

「蘭、お疲れ様」
「ありがとう、新一。戻ってきてくれて、最高に嬉しいよ」

二人で笑い合った。
服も何もかもボロボロの新一なのに、それでも私を必死になって助けてくれようとした。
…死んだなんて、嘘に決まってる。
新一は、絶対に死なさないし、死なない。

「おぉコナン君！無事だったか！」
「うん！火の中ってホント暑いね！僕、暑さに耐えながらも蘭姉ちゃん探したんだ！」
「よく頑張ったな！コナン君！服部君や阿笠さんも来ている」
「新一君！良く、戻ってきてくれたのぉ！」
「博士！」
「待ちわびたで！死んだかと思て心配してしもたやんか」
「よかったわ…それと本当に、御免なさい。何もかも私が原因だから」
「紅も、気にするな。あ…解毒剤、有るか？無かったら良いんだが…」
「えぇ、これ。シェリーの代わり。シェリーはショックで気を失ったみたいだから」
「そうか……」

そんな会話を聞いている内に意識が遠のき、そのまま目を閉じる。
新一のその会話だけが最後に聞こえた。

――怖い。

新一が、いない。　暗い世界。

助けて　たすけて　タスケテ

「ど……？蘭……態は」
「貴方、人の心配する前に自分の心配しなさいよ。幾ら動けるからって」
「蘭の方が心配だ」

「ホンマ姉ちゃんのこと好きやのぉ…姉ちゃんのことにかかると、工藤ってホンマ可笑しゅうなるからな」
「あぁ？和葉ちゃんが好きなお前に言われたかねーよ」
「言うたな工藤！？」
「あぁ言ったさ！」

聞き覚えのある声と、冷静な声と、関西弁。
その声が霞の向こうで聞こえた。

「……ん」
「蘭！？」
「気ぃついたんか！？」
「どう？私達の声、聞こえる？」
「……うん」
「良かったわ…何処も以上はないから動けるし、大丈夫よ」
「哀ちゃんと紅ちゃんに服部君、有難う。……って嘘！？新一、元に戻ってる！！！？」
「あぁ……ただ今、蘭」

おかえりなさい、と私も返す。
ちゃんと言えた。
心からのおかえりなさいを。

「蘭、動けるなら表にでれるか？」
「え？う…うん」
「アホ！工藤も姉ちゃんも怪我完全に治ってへんのに何言い出すんや！」
「良いだろ！一寸だけだ」
「はいはい、ラブラブは外でやるって事ね」
「ラブラブ！？紅テメェ…」

「知らないわ。…さ、早く行ってきなさい」
「お、おぅ」

そんな会話を背中に私は表へと出る。

外はごく普通の景色。

晴れ渡る空　白い雲　弱く私達を照らす太陽光
時折鳴いている鳥　何処かで聞こえる楽しそうな声

風が吹き　雲が流れ　地面の草が靡く
何も変わらない景色に、私は少しだけ安心する。

「で、新一。話って一体…」
「いや…謝りたかったんだ」
「え！？新一は何も謝ること無いよ！？」
「……守りきれなくて…御免。火炎に足取られて、挙げ句の果てに俺は気を失ったんだ…蘭の声がなかったら、俺はきっと生きてなかった」
「新一が死んだなんて、信じ切れなかったから。何時も、死にはしないって自分で言ってたのに、死なれたら――困る。此からも精一杯生きていくんだから」
「――でも。まだ、終わってないんだ」
「組織との戦いでしょ？…また、逃げられたからね」
「あぁ……だから」
「工藤君！！！！大変よ！！」
「灰原？どうした？」
「こっ…これ！」
「え、何だこ……れ！！！！？？？ちょ…挑戦…状…」
「何処から来たのよ工藤君！？」

「……組織から」
「何ですって！？」
「俺の体が生きているのを良いことに挑戦状ってか…」
「でも、中身は…中身はどうなってるのよ」
「……見ての通り、白紙だ。ただ挑戦状とだけぽつりと書いてある」

新一が私達に向けた紙は、本当に真っ白で。
真ん中にぽつりと『挑戦状』と書いてあるだけ。
何の目的で…？

新一を殺すため？私達を殺すため？哀ちゃんを裏切り者として殺すため？

…とにかく、殺すことに代わりはないような気がする。

「また…行くの？」
「…其れしかねぇようだな。俺がもし死んでると思われていたら、こんな挑戦状送ってもこねぇよ」
「そうね。奴らは何がしたいのかしら」
「其れは俺にもわからねぇ。ただ、彼奴等の目的は俺を殺すことか、蘭たちを殺すことか」
「裏切り者の私を殺す…そうでしょ」
「其れ位しか考えようはないんだ。…さて、行くとしますか！」
「え！？もう行くの！？」
「封筒見てみろ。ご丁寧に日にちまで書いてやがる。…この日に来いってことだろ」

封筒には『四月七日』と書いてある。
今日は丁度その日。

…いってらっしゃいと素直に言えるだろうか。

「蘭」
「…何？新一」
「ほら」

そう言って差し出されたのは、新一の手。
…所謂、握れって事？
一寸緊張しながらもその手を握る。

「お前も、来いよ。ぜってー守ってやっから」
「新一…」
「お前一人置いてしまうと、帰って来れないかもしれないからな」
「し…新一…っありがとう！」
「べっ別に。――それに、蘭を待たせたくないから」

私は、有難うという代わりに笑顔を作る。
待っててと言う言葉は聞き飽きていたし、新一を一人にしたくなかったから。

「…行くぞ。灰原はどうする？」
「勿論、同行させて貰うわ。貴方一人だと、蘭さんを泣かせるからね」
「テメェ、行く前にも最悪な言葉をよくも…っ」
「何か言ったかしら」
「いいや！何でも有りませんっ！」

急いで訂正する新一とその向かいで薄く笑う哀ちゃんの光景を見ていた。
その光景を見ているだけで自然と笑みが浮かんでくる。

「…そろそろ行きましょう」
「あぁ。…でも、場所は何処なんだ？」
「それもそうね…。あの建物は組織自ら崩壊させたし」
「手紙に場所は書いてねぇみたいだな…。…あ」
「雨だ…早く中入らないと！」
「そうね。…工藤君？」
「一寸待ってろ。今、確かめたいことがあるからよ」

そう言って雨の中、私と哀ちゃんは新一のやりたいと言う事に付き合っていた。
五分ほどした後、新一は口を開いた。

「やっぱりな」
「何がやっぱりなの？新一」
「見てみろ。水で文字が浮かぶ設定になってやがる」
「ホントだわ。…これ、なんて書いてあるのかしら。来…場……峠『来場峠』！？」

新一の言ったとおり、手紙の『挑戦状』と言う文字の上に『来場峠』と言う文字があった。
そんな仕組みだなんて、新一もよく分かったよね。

「来場峠と言えば、赤井秀一がキールに殺された場所だ」
「じゃ、じゃあ其処に組織の人がいるって訳？」
「あぁ、そう言うことになる。…相当危険だ」
「確かに。一応道路もあるし…。警察にばれれば大変なことになるわね」
「ま、ジンもそれなりの場所は用意してあるんだろうけどな」
「そうね…。じゃ、博士にでも連れて行って貰おうかしら」

「…彼奴等にはばれないように行かねぇとな」
「彼奴等？紅ちゃんと、服部君？」
「あぁ。二人揃って俺に何かあると飛んでくる奴だから」
「なら、私達で行く方が良さそうね。博士は部屋にいるから」
「…おし。行くぞ」

そう言って、雨の中傘も持たずに私達は走り抜ける。
来場峠…？
聞いたことのない場所に、私は首を捻っていた。
新一と哀ちゃんは分かっているようだったけれど。

一時間ぐらい走ったところで、来場峠という場所に着いた。

其処は人気もなく、不気味なところだった。

「怖…」

思わずそう呟いたが、新一の腕が私の前に庇うように出てくる。

「大丈夫だ。組織の奴らは前か後ろか…上から来るだろうな」
「どっからでも掛かってきなさい、って所ね」
「あぁそういう感じだ。…って言っても四方八方囲まれてるんだけどな」

その言葉を合図にか一斉に銃声が飛ぶ。
何発かは避けたものの、新一は肩に銃弾を哀ちゃんは腕に銃弾を食らってしまう。
唯一無傷だったのは、私だけだった。

「……くっ。やっぱり拳銃無しじゃ……辛いな」

「やだ、新一！腕から」
「気にすんな。これ位…何ともねぇから。痛いって言ったらお前が悲しむだろ？」
「え…？」
「工藤君！後ろ！」
「おわっ！」

大慌てで新一は飛んでくる銃弾をよけた（奇声付きで）。
それにつられてか、私もよける。
…でも、その二・三秒後。
私の腹当たりに痛みを感じた。
その場で崖にぶつかり、座り込んでしまう。

「……っ」
「蘭！！！」
「大丈夫だよ…これ、ぐら…い」

そう言って立ち上がる。だけど、力が入らない。
道路の中間に来たときに、追い打ちをかけるように私の肩に銃弾が当たる。
その後、体がガードレールに当たった衝撃を覚える。
…だけど、それだけじゃなかった。

ふと私の体が浮く。
一瞬頭が真っ白になった。

…ガードレールを越えて…落ちようとしてる…？

「蘭ー！！！」

新一の手が私の腕を掴んでる。
肩痛いのに、大丈夫なの！？と私は驚いた状態で言う。
すると、新一は苦しそうな表情で、バーロと一言言った。
「オメェを守るって言ったの、俺だぜ？だからっ死なせは…しねぇよ！！！」
その言葉と同時に私は新一に引き上げられる。
腹と肩に銃弾を食らっているだけあって、可成り息苦しくはなってきている。
新一に抱えられながら、私は必死になって立ち上がる。
「無茶はすんな。…お前が怪我してるの見てたら、こっちも辛いんだ」
「でも…」
「良いんだ。俺もお前も生きて帰りたいだろ？だから、其れまでの辛抱だ」
「工藤君！左！」
「伏せろ！蘭！！」
私は言われるがままにする。
そうでもしないと、私の命まで大変なことになってしまう。
勿論…新一も、哀ちゃんも。
「俺等に為す術はないのか」
「あら？向こうに拳銃が有るわ。でも、それが…罠なのか、其れで勝負しろって言うのかは分からないけど」
「勝負しろって事だろ。俺等が武器を持ってこなかったと分かっていて用意したんだろうし」

新一は拳銃を手に取る。
別に何も起こらなかった。唯、静寂が続いていただけだった。

「なら…行くぜ…？」
「気づくのが遅すぎだ。工藤新一」
「なっ！？何時の…間に」
「一時間ほど前から貴様の後ろにいたのだが、気がつかなかったようだな」
「気配も何もしなかったぜ」
「拳銃を持っているなら…」

『今すぐ死ぬんだな』

そう言ってジンは、新一の額に拳銃を向ける。後数センチで、額にくっつくという位に。

「此処で俺は赤井秀一みたいに頭を貫かれて死ぬってか？其れは御免だぜ。お前等を殺すために俺は来たんだぜ？」
「貴様から殺すのが先ではないのか。それとも、シェリーや毛利蘭の方が良いか」
「…二人に手を出すな！少なくとも手を出すなら俺だけで十分だ！」

新一は、ジンに拳銃を向けながらそう叫ぶ。
私は居ても立ってもいられない状態だった。
新一を助けたいのと、ジンに対しての怒りで飛び出したい衝動を必死に抑えた。

「新一…」
「蘭は其処にいろ。…絶対に死にはしないから。何があっても、この場で死に顔は見せねぇから」

そう言って私に微笑む新一の顔に力はなかった。
いつもより、可成り弱ってる。
まだ怪我も治りきっていないのだから、仕方がないのかもしれない。
…新一を助けたい。
でも…どうやって？どうやったら新一を助けられるの？

「ジン！貴方の目的は、新一を消すことだけなの！？」
「ふん、今更気がついたか。シェリーと工藤新一を消す…其れだけだ」
「…なら…私を代わりに殺しなさい！！！」
「蘭！？」
「蘭さん！？」
「新一と哀ちゃんを傷つけたくない！傷つけさせない！なら、私が死ねば新一と哀ちゃんは助かる！そうじゃないの！？」
「…そこまで言うなら殺っても良いが」
「勝手にしなさいよ。新一と哀ちゃんを傷つけないのならね」
「そのままにしておいてやろう。貴様の覚悟は出来てるのか」
「えぇ、既に出来ているわ。何時でもしなさい」

ジンが新一から離れ、私の目の前まで来る。

「最後に言うことはないのか」
「…ありがとう、それだ…」

それだけ、と言い切ろうとしたときに私の頭に電気が走る。
生ぬるい物が顔を伝う。
其れが瞬時に血だと分かった。
意識をどんどんと手放していく私。

これで…新一と、哀ちゃんは助かった。

なら私は、悔いなんて無いよ。

今まで有難う

新一　哀ちゃん

さようなら――。

第十七話　蘭の死（後書き）

御免なさい＞＜；；；；

蘭ちゃんをっ…（泣（書いたお前が泣くなよ

第十八話　後悔（前書き）

一ヶ月も更新しないで御免なさいでした＞＜
このお話ではジンが一応死んでしまいます。
ジンファンの方は見ないことをお勧めします。

第十八話　後悔

「ら……ん…！？」

俺は、目の前を光景を現実として受け入れることが難しかった。
スローモーションで、ジンの前に倒れていく。

目は徐々に閉じていく。
血は止まらない。

最後にドサッという音

「嘘だ……らぁぁぁぁぁぁぁん！！！！」

俺は我を忘れて蘭の元に駆け寄る。
何度もその名前を連呼する。
叫ぶほどに連呼する。

だけど、蘭が目を覚ますことは――…一度たりとも、無かった。

俺の頭の何かがぷちんと音を立てて切れた。
勢いよく立ち上がり、蘭を射た相手に拳銃を発砲する。
続いて灰原も発砲し、相手はすぐに倒れた。
隙があったから良かったものの、もしもなければ俺達だって即死していたはずだ。

そして、組織の奴らからの攻撃はなくなった。
だけど俺達は、落ち着く事なんて出来もしなかった。

「嘘だって…言えよ、蘭。なぁ…蘭…蘭！！！！」

滅多に流さない涙を流しながら、腕の中で冷たくなっている蘭を見た。

微かに、口元が曲がっている。

……もしかして、笑ってる？

何が嬉しいんだよ…どんな理由で笑ってるんだよ…。

俺等を助けれて蘭は嬉しいかもしれないけれど、俺は…大事なこと一つ伝えられずにいて、悔しいんだ。

「目を…目を覚ませよっ…蘭！！！！！」

蘭の服にどんどんと染みが出来ていく。

其れは耐えることなく出来ていっては、消えていく。

目の前で、最愛の人を失った気分だった。

でも、何時か目を覚ましてくれるだろうとそんな一縷の望みを俺は持っていた。

絶対に死なせはしないと俺は誓った。

だから…だから…何が何でも蘭を助ける。

闇の淵から、救ってやる。

だけど、救える手だては全くない。

…蘭、お前の心の力だ。

蘭を救えるのは今、蘭自身しかいない。

自分の心の力。其れを使えば現実に戻れるかもしれない。

そんな馬鹿馬鹿しい考えを巡らせてみる。

心の力で、闇の淵からはい上がれるなんて…。
余程のことがない限り、無理だと思う。
例え、蘭の気持ちがどれだけ強くとも闇の中から抜け出すには相当な無茶だ。

帰ってきて欲しいと言う俺の願いは、きっと何処にも届かず途中で消える。
果てもなく闇は続いて、出口は見つからない。
光という出口は、何処にもない。

額を貫かれた蘭はきっと、もう生きてはいない。
悔しい。悔しすぎる。
自分はどうして、守ってやれなかったんだと。
死なせはしないと言ったのは俺なのに…。
結局はこんな残酷な形で、約束を破って…。
何も出来ない自分自身が死ぬべきだった。

俺は何時も守られっぱなし。
守ってやるとはいうものの、蘭に励まされてきた。
結局俺は、自分の力で動いていたんじゃなくて蘭の力で動いていた。
自分の力を碌に使わずに、蘭の力にほんの少し頼っていた。

俺の膝の上で眠る蘭は、昨期有った微かな息までが跡切れてしまった。
このままで、生き返るはずはない。
俺は、声も出さずにただ、肩だけを震わせて、泣いた。

「御免な――本当に、御免。蘭」

だから、目を覚ましてくれよ――と言いたかったけれど蘭は既に闇

の中。
もう…帰っては来ないだろう。
このまま放っておく訳にはいかないと分かっているのに、何故か体が動かない。
病院に着いたところで手遅れだと言われ、突っぱねられるのだろうか。
もう…為す術、無しだ。

――その時だ。俺の膝の上で、体が動くような感触。
そして、ゆっくりと目を開けていく蘭。

「……新一」
「蘭！！！！！」
「蘭さん！？」
「嘘…新一、泣いて…」
「死んだかと、思ったじゃねぇかっ…」
「御免、ね。実は……新一に逢いたいって想ったんだ」
「え？」
「暗くて何も見えない場所で私は一人突っ立ってて、出口を探したんだ」

光も何もなくて、暗いしなにもない。
其処で俺が何処にいるのかを必死になって探した。
逢わせて欲しい、とずっと思っていた。
暫く歩いている後、何か木洩れ日のような弱い光が向こう側から洩れていると気がついた。
急いで其処に向かって走った。
もしかして、ゴールなんじゃないかなと。

「…そしたら、目の前に泣いてる新一がいて…」

「男が泣くもんじゃないよな…」
「ううん、泣きたいときは泣いたら良いの。そんなの男も女も関係ない」
そう言って俺の涙を指で拭き取る。
「大丈夫。私はどんな時でも、必ず新一の所に帰ってくるから」
「御免な…なんにも守ってやれなかった」
「守られっぱなしだから、自分の身は自分で守りたいのが基本なんだけど…私は新一を必死になって守る。そう決めてるから」

（…蘭）
俺は心の中で蘭に言葉をかける。

俺は蘭に守られっぱなしなんだ。
嫌と言うほど、守られてきて逆に自分として辛かった。
どうして此処までに人の力を頼ろうとしているのか最初は分からなかったんだ。
でも、今なら分かる。
俺は、蘭の笑顔を頼ろうとしていたんだ。
その笑顔が俺の全てを支えてくれる。

…だから、責めてその笑顔を忘れないで欲しいから。
そんな死に顔なんて、見たくもない。
優しく微笑む蘭の顔が、俺の全てを安堵させてくれる。
…そんな蘭の力に俺は頼ってたんだ。
だから、少しで良い。
力を貸して欲しいんだ。
ほんの1パーセントでも十分なぐらいだ。
…この先、俺はずっと蘭を守ってやらなきゃならない。

だから……そのための力、少しでもくれたら俺も嬉しい。

「…良いムードの中入らせて貰って悪いけど」

そう言って、灰原は腕組みをしながら俺を見ている。

「病院、行かなくて良いの？」

『あぁっ！！！』

忘れてた。

意識が戻ったのを良いことに言葉で振り回していた。

「急ぐぞ！灰原、病院に頼む！」

「面倒だけど行ってくるわ。蘭さんをきちんと連れてくるのよ、良いわね？」

「わーってるよ」

「じゃあ、お願いね」

そう言った後灰原は腕を押さえながら、走っていった。

（頼んだぞ、灰原）

そう心の中で呟いた後、蘭を支え歩き始める。

「動けるか、蘭」

「何とかね…。それと、包帯有難う。また、新一に助けられちゃったね」

「バーロ、俺はお前に助けられてんだよ」

「…へ？」

「いや、何でもない」

そう言って、前をむき直す。
蘭が、俺の顔をのぞき込んでいるのが分かった。
「大丈夫？新一。凄く…困ってるみたいだけど…」
「あ、あぁ。気にするな」
「なら、良いけど」
「悪ぃな、心配かけたみてぇだな」
「大丈夫だよ。新一が大丈夫って言うならね」
大丈夫、と俺は一言言ってまた歩き始める。
病院はもうすぐだ。
かれこれ二時間はこうして歩き続けている。
足も棒になってしまっているけれど、無事に蘭を運び終えたいから
そんな事を口に出すことはなかった。
病院に着いたとき、蘭はすぐに集中治療室に運ばれていった。
俺と灰原も、軽く手当をして貰った。
そして、その後は蘭が出てくるのを集中治療室の前で待っていた。
蘭が集中治療室に運ばれて三時間ぐらいの時、俺の携帯が音を立てた。
その音だけが虚しく病院に響き渡っていた。
急いで俺は電話に出る。
「もしもし、工藤で――」
『あら、新ちゃん？元気してた？』
「か…母さん！？どうしたんだよ！？」
『新ちゃん元気かな、って電話したかったの！』
「それだけ？」

『うーん…それより、蘭ちゃん大丈夫？』
「……母さん何でそんな事知ってるんだ？」
『気がつかなかった？私、新ちゃん達が対決している間、組織の人のふりしてたのよ？まぁ、見えない場所にいたけどね』

（そりゃ分からんわ）

俺は若干呆れ顔になった後、すぐに表情を戻して母さんと呼ぶ。

「蘭は今、集中治療室にいる。…恐らく、額の所の出血を止めたりしていると思う」
『そう…また病院に行くからね☆』
「母さん来るのか！？蘭、びびるぞ！？」
『ま、良いじゃない！じゃあね～』

そう言って電話は向こうから切られる。
携帯に向かって、溜息をついた俺を見てか灰原はくすくすと肩を揺らしていた。

「楽しそうだったみたいね」
「…全然。母さん対決の時、変装してたみたいだぜ？」
「気がつかなかったわ」
「だろうな。俺でも気が付かなかったんだし」
「…で、病院に来るのね？」
「あぁ、どうせそうなるだろうとは思ってたし」

はぁと溜息をついて俺は膝に頭を乗せる。
やっぱり俺に蘭を守る資格はないのかもな…。

自分で守るとか言っておきながら、死と生の境を行き来させてしま

った。

あれは確かに蘭自身が望んだこと。
だけど、其れを何で俺は止めなかったんだろう。
あの時、俺の体は金縛りでもあったみたいに動かなかった。
…其れだけ、蘭の決意は固かった。

いや、固かったの話で済む事じゃない。
其れでもその金縛りみたいな感触を振り切って助けに行くべきだった。

手術が始まって約七時間。

蘭は、手術を終え集中治療室から出てきた。

「蘭さんは無事です。安静にしていれば五ヶ月一寸で退院できるでしょう」
「良かった…」
「取り敢えず、病室へ移動しますので。もしもその後、蘭さんに異常が有れば、連絡してくださいね」
「解りました」

そう言って俺は、蘭が眠っているベットを運ぼうとする看護婦や看護師と共に病室へと同行した。

病室で、大変なことが起こると言うことを知らずに……

第十九話　記憶喪失

俺等は病室に入って、蘭が目を開けるまでずっと待っていた。
俺と灰原は漸く組織の一人、ジンを倒すことに成功した。
後は、組織のボスにあたる奴を倒せば、問題はない。

「……ん」

そんな事を考えたとき、蘭の方からそんな声が聞こえはっと息をのんだ。
此処、何処？と蘭は辺りを見渡す。
病院よと灰原が答えたのと同時、蘭はこちらを向く。
そして、口を開く。

「哀ちゃんと……誰？貴方誰なの？」

俺はその言葉を聞いた途端、目の前が真っ黒になった。
…俺のことだけを、忘れている？
なんで？手術は成功したって……。

「なぁ灰原。これ…どういう事だ？」
「恐らく手術の時に細かいところでミスしてしまった記憶喪失になってしまったんだわ…何でか貴方のことだけね」
「っ……くそっ！！」
「恐らく貴方との思いでも……闇の中よ」

「なんで…俺なんだろうな」
「解らないわ…でも、大丈夫よ。何れ記憶は戻ってくるわ」
「だと…良いな」

そう言って、ふっと目を伏せた。
やっぱり、大切な人である蘭に俺のことを忘れられたとなると…辛いな。

「ねぇ蘭さん」
「ん？何？哀ちゃん」
「工藤新一って子、覚えてる？」
「工藤新一？……想い、出せない。哀ちゃんの隣に座ってるのが、その工藤新一？」
「えぇ…貴方の幼馴染みよ」
「そうなんだ…なんだか、懐かしい雰囲気だね。新一君って」
「何時か、彼のことを思い出す日が来るわ。そうしたら…今まで精一杯貴方を守ってくれた工藤君に、何かしなくちゃならないわね」
「そう…だね」

蘭の表情は、酷く複雑だった。
その顔からは何を考えているのかは、解らないほどに。

幼馴染みで、ずっと一緒にいた蘭。
何よりも大切で、守ってやりたくてしょうがない蘭。
…そんな蘭は、俺を忘れてしまった。

全ては、あの会話から始まった。

『新一と哀ちゃんを傷つけたくない！傷つけさせない！なら、私が死ねば新一と哀ちゃんは助かる！そうじゃないの！？』

『…そこまで言うなら殺っても良いが』
『勝手にしなさいよ。新一と哀ちゃんを傷つけないのならね』
『そのままにしておいてやろう。貴様の覚悟は出来てるのか』
『えぇ、既に出来ているわ。何時でもしなさい』

…蘇ってくる言葉。
あの言葉を言わせてしまったのは…俺なのかもしれない。
何度も死にかけて、何度も傷ついて。
手負い状態でも必死になって守ろうとした。
…蘭の決意が固いのは解ったけれど、何故止めにいけなかったんだろう。
体が金縛りにあったかのように動けなくなってしまった。
（だから、其れ如きでは済まないんだって！！！）
頭を二度三度横に振った。しかも結構激しく。

動けなくなってしまったからの話で済むほど簡単な事じゃない。

「なぁ……蘭」
「え？な、何ですか？」
「敬語使わなくて良いから。…本当に忘れてしまったのか？何も、かも」
「思い出せないんだ……。貴方が工藤新一だと言うことさえも」
「良いんだ、無理矢理に思い出さなくても。徐々に思い出して行けたら、良いから」
「ありがとう……えっと」
「新一で良いから。お前、何時も俺のことそう呼んでたから」
「わかった。…ありがとう、新一。私、頑張るよ。記憶を取り戻す

ために！」
「頑張れな、蘭」
何時だって俺は、お前の味方だから。
その言葉を出しかけたけど、飲み込んでしまった。
「でもね、新一。何か新一の隣にいると、凄く懐かしい雰囲気がするの。心が安らぐんだ。気のせい、かな」
「気のせいじゃないさ。俺だって……同じだ。蘭とはずっと前から一緒にいた。…思い出すときが来れば分かるから」
「うん。其れまで頑張るよ、私。新一を傷つけないためにも！」
抱きしめたい衝動を必死になって抑えた。
そんな言葉言われて顔の温度が上がったと思うのは気のせいではないだろう。
俺は暫く継ぐ言葉が見つからなかった。
言いたいことは、山ほど有るのに何故か言葉にならない。
気持ちしか心に出来なくて、其れを言葉に代えることが出来なくて――。
何だろう、このもやもやとした気持ち。
心の中に掛かった霧なのだろうか。
良く、分からない。
今この時点でも言葉に出来ずにいた。
何で――？
「新一？」
「え？あ、どうした？」
「考え込んでるでしょ。何かあったら私に相談してよね。……東の

名探偵さん？」
「な！？お前、記憶！！」
「だいたいは思い出せたよ。今必死になって思い出したんだ」
「無理矢理思い出さなくても良かったのに」
「思い出したかった。早く、目の前で新一を感じたい。記憶を失ったときの私じゃなくて、記憶がちゃんとある時の。…少し感じる新一が違った気がする」
「長年一緒にいただけあって、雰囲気は違うんだな。記憶がないときと違って」
「うん。…だけど、まだ全部は思い出せてないの。…紅ちゃん達と初めてあったときの事までは…」
「馬鹿！！！」

其処は、正直言って忘れた方が良い場面だ。
蘭にとっても、灰原にとっても、俺にとっても悲惨な場所で悲惨な記憶だった。

「し、新一？」
「其処は忘れた方が良い。…お前にとっても、俺にとっても最悪な場所であって記憶であるから」
「記憶は無理には消せない」
「ら、ん？」
「戻った記憶は、無理には消せないよ。消えた記憶も、自動的に戻ってくる。…消すこと、出来ないんだよ？」

その声は大人に近いぐらい冷静だった。
そして俺を見つめる静かな双眸――逆らえなかった。

「そう、だな」
「ねぇ工藤君」

「あ？どした、灰原」
「ジン、射殺されたでしょ？だけど、まだウォッカとかいるじゃない？……変装して、この辺を彷徨(うろつ)いているらしいの」
「それって大抵ベルモット当たりがやることだろ」
「そうね。…狙われる危険性は大有り。…だけど貴方と彼女は狙われる確率は低いわ」
「え？」
「赤井秀一を殺すために向かった場所で、彼女に助けられたらしいわねベルモット。だからまともに殺すことはないと思うわ」
「でも、お前は」
「ま、死ぬことぐらいは分かっているけどね。何時殺されても、可笑しくはないわ」
「……迎え撃つか？」
「今回はパス。私達、色んな事で怪我したでしょ。だから、逃げさせて貰うわ」
「分かった」
「あら、異を唱えないのね。いつもなら逃げてばかりじゃ駄目だとか色々言ってくる癖に」
「別に。正直俺だって蘭がこの状態でいる間は組織との対決は避けたいから」

なるほど、と言って灰原は一旦其処で言葉を切った。

「幾ら組織の正体を突き止めたいにしろ、危険なこと過ぎることぐらい分かるしね。…今回はパスを選んだ…って訳？」
「そんな所。…はーっそれにしてもほんと暑いなこの部屋」
「暖房が効いてるんじゃない？…私的には丁度良いと思うけれど」
「オメェって寒がりなのかよ」
「あら、悪いかしら」
「べっつに」

そういって俺はふぅと溜息を付く。
蘭が記憶を戻さない限りは、呑気に組織と対決しているわけにはいかない。

ただ――

二人を、守らなくてはならない。
それが俺の心を揺さぶっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1059d/

悪魔　―Akuma―

2010年10月9日21時18分発行